明治二十一年五月二十日發兌

以良都女

第十一號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第十一號目次

社説。　結婚論。
小説。　空行く月(第三回)。
家政。　馬脾風療法=小供を素直にする法=人工の片輪=急病療法=あどけなき娘。
流行。　衣服の織地=ハンケチ=香水=靴=淑女夜會服=男子の洋服=ぼたん=烟草入=烟管=夏帽子。
化粧。　化粧藥えらみ方=肌のキメを良くする法=新製羽毛の蝶々簪。(密書入)
批評。　浮雲細評。
文藝美術。　音樂獨稽古=新作唱歌=世界第一芝居正本=大した筋書。
雜纂。　縁組を占ふ奇法=惡聲憂ふるに足らず。蒔絵の名。
學藝。　蚊の話(密書入)。
寄書。　束髪詳論。
月報。　三十件。
餘興。　新作謎四=御笑草二。
通信問答。
通俗衛生學講義。　醫學士竹中成憲氏述。
譜付唱歌。　花の雲

いらつめ名譽賛成員

いろは順

法學士　一木喜徳郎君
高田政久君
高田幸子君
文學士　高田早苗君
醫學士　竹中成憲君
上野銀子君
井上十吉君
香羽富士子君
小具貞子君
文學士　岡田良平君
山川二葉君
後閑菊野君
合原琴子君
文學士　天野為之君
秋山四郎君
佐方鎮子君
佐野安君
理學士　飯嶋晉君
理學士　宮崎道正君
杉浦重剛君

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第十一號

社説

社會の組織と結婚の弊害

家族を以て社會の元素となす可きか各個人を以て社會の元素となす可きかとハ現今學者の間ニ盛に行ハるヽ議論なり。斯く言へば甚だ高尚の議論にして容易に解し難きが如くなれども家族を以て社會の元素とし各個人を以て社會の元素となすとハ決して左迄に解し難きヿニ非ず。蓋し法學の上ニ就て之を言へバ權利と云ひ義務と云ひ頗る佶屈聱牙の説明を要すべけれども廣く社會の組織上ニ就て之を言へバ敢て左程困難なる説明を要せず。各個人を以て社會の元素と爲すとハ日本從來の習慣の如く親の勞働する間ハ子之ニ養ハれ子の勞働する間ハ親之に養ハれ兩生相待て始めて完全なる一生活を爲すが如きと無く已ニ自ら勞働し得可き年齡ニ達しさるもの未だ自から勞働し能ハざる年齡ニ達せざるものハ同居と別居とに論なく自から其力に衣自から其力に食するの謂なり。蓋し世間にハ常ニ二樣の力ありて並び働くものにして一方にハ一種の勢力ありて社會の團結をして愈々大に愈々强からしめ又一方にハ他の勢力ありて家族の團結を破壞し各個人の働をして愈々其範圍を廣からしむるものなり。故に世の進むに從て漸く各個人を以て社會の元素となすに至るハ自然の成行なり。社會の此の如き組立にも種々の利益あるべく亦其利益ニ伴ふ所の種々の弊害もあるべしと雖ども其人々の勉强力を鼓舞し社會の富强を增すが如きハ今余儕の説かんとする所に非ず。余儕の此に論説せんとするハ只其婚姻の弊害ニ對する關係に過ぎざるなり。

婚姻の弊害ハ其數頗る多かるべしと雖ども先其最も肝要なるものハ早婚輕忽の婚姻壓制の婚姻親族の婚姻の類なり。世人動もすれバ則ち曰く西洋人ハ概ね皆先見の明ありて夙ニ早婚の男女ニ害あり子孫ニ害あるを知るが故、體質已ニ具ハるも猶容易ニ結婚せず勤勉勞力して若干の財產を泚し、而して後始て夫妻の關係を結ぶと雖とも日本人ハ則ち然らず早婚の各自ニ害あるを問ハず禍を子孫ニ貽すを顧みず口猶乳臭ニして早く已ニ結婚するもの比々皆然り民度の進步東西相異なる此の如しと。是畢竟事情ニ通せさるの論而已。夫婚姻ハ人世の一大樂事なり。口ニ味ふ可からず目ニ見る可からず耳ニ聞く可からずと雖とも夫妻の間ニハ自から靄然とし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て言ふ可からざる情味あり。 已に一通の人間となり普通の人情を解する者をして外部に迫りたる必要も無きに此人世の一大樂事を取らざらしめんとするハ抑も難し。 西洋に早婚の少なきハ必ずしも人智の進みたるが爲に非ずして社會の組織主として之をして然らしむるなり。 我結婚を欲せざるに非ず夫妻の生活を支ふるの資力なきを如何せん。 之を父母に求めんか社會の組織之を容るさず。 自から勞働して之を求めんか我力猶足らず。 路頭に彷徨し飢餓に號叫せざるの道ハ只婚姻を結ばざるの一法ある而已。 故に西洋諸國に於て早婚の弊害少なきハ必ずしも人智の進みたるが爲に非ず社會の組織主として之をして然らしむるなり。 西洋の美風ハ其實已を得ざるに出でたるなり、所謂怪我の功名なり。 然れども假令怪我なりとも功名ハ到底功名なり、已を得ざるに出でたれバとて美風の美風とならざるの理なし。 故に日本人ハ何處迄も西洋の美風を學ぶべし。 只徒らに早婚の弊害を論陳するも其効甚だ少なく其弊害を永遠に除くの道ハ主として社會の組織をして早く自然の變遷を受けしむるに在らんとを恐るゝのみ。 輕忽の婚姻に至ても結婚者已に相當の年齢に達して血氣已に定まり又男女各々相扶くるに利あるものを撰むの必要あるの故に其弊害差し自から減せん。（未完）

社告

いらつめ第一號發兌以來漢字のふり假字は先づ最初に出たる字にのみ施こし、其ふりがなの見合せ易き處に出たる漢字には特更ふり假字を廢せしが、いらつめの良友達より忠告を蒙りしこと度々なれば、本號よりは漢字にはベタに假字をふり申し候。 せめていらつめを讀るゝ妙齢の淑女の漢字を習ばるゝ助にもと、當初記者の懷きたる老婆心を貫かざるはいと遺憾なることながら、良友達の忠告も理なきにあらねば其意に從ひぬ。

此度ハ「束髪に就て」と申す面白き投書ありて寄書の欄に掲げたれば「用器畫稽古の仕方」の續き、幷に拙話の「姑と嫁」ハ次號に掲載いたすべし。 又小說「むかし忍ぶが岡」ハ本號より掲ぐべき御約束なりしが餘白なければこれも次號まで御預り。

●醫學士竹中成憲著 **肺病養生法** 一冊郵税 一冊郵税共金六錢 ●此書ハ肺病患者ハ勿論肺病の恐ある人も一讀すべきの良書にして目次ハ衣服、呼吸器、入湯、飲物、食物、煙草、運動、寝床、談話、勉强、職業、藥、温泉なり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小説

空行く月

美妙齋主人

第三回　では風の便が宿鳥を駭かします。

男女交際の議論が熾盛になッて來てから以來、世話を燒く匂も世に高い柿持なま子はまだ消えぬ鐵漿の痕を隱さうとて笑ふにも口をすぼめて婦人の靜淑を見せれば、また麵棒で無くて鐵棒を曳く更科そば子は唇も薄刃の（唇は薄い方が宜いのです、厚いと夜具の何とかです）蕎麥切庖丁で舊來の習慣を袂と共にぶつりと斷切り、跡を筒袖に縫直します。なに「日本の婦人は殺風景です」と……どうして、口をすぼめて笑ふのも美術の理に明るい故です。なんの「日本の婦人は因循な物」でしやう……どうして、習慣を袂と共に斷切るのは果斷のある證據です。「筒袖に縫直す力が有ッて淑德の綻を縫直す力が無い。否さ、淑德の綻をこしらへるとは如何いふ譯か」などゝひめき立てるのは食はず嫌ひの古學者の評論。さて、それらの淑女紳士の諸君も皆教育を持ッて居ます。それを内部から觀察しない處からその樣な評も出て來るのです。何とか言ふ西洋の博士も斯う言ッたさうです（まづ博士も聲を掛けると、聞かぬ内から說が好ささうに思はれるから有難いです）……「教育を受けた者に限ッて不義の事で令德を辱しめた例が無い。有ッたらそれは例外だ」。なンと古學者先生如何です。金言でも有りませんか。いや金科玉條……頼もしいです。

一間の裡では阿輝の聲。

「乳母ア」。

乳母は第一回に出たのと同じ者、としごろは四十二三、阿輝には小さい時から附添ッて居る親しい人です。呼ばれましたので次の間の襖を明けて顏を出し、

「もイ、何か御用で」。

「あの御前、知ッてるかね、この書架へ載せて置いたポルカの譜を。何處へ行ッたか見えないよ」。

「ポルカ……何で厶いましたッけね、あのポルカとは」。

「はゝゝ、御前もよく忘れるねェ、昨日も教へたのよ。あの音樂の調子の書いてある物さ」。

「えゝ、あの紙へ墨で摺ッてある……」

「いやァな乳母……わたりまへだよ」。

「あれは、ね、阿娘さま」。

言ッたばかり眉を蹙めます。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「どうしたの」。
「あれへ貴女ハ香水を昨日御掛遊ばしましたらう」。
「あゝ何故」。
不審の痕ハ厚く阿輝の眼の中へ現れて、其眼ハ瞥然と直側の香水吹に向きましたが、直にまた方向は乳母の顔へと移ります。
「昨日西山さんが(此人の素生ハ其内に分解ります)。貴女の御留守へ入らしッて默ッてその譜とやらを見て覗いて居らッしやいましたが……」
何か意外の事と見えて阿輝ハ乳母の返辞の終るのを待ッて居ません。急に話の腰を折ッて、
「そして又持ッてッたの」。
「えイ。　阿輝さまの物ハみンな芳い香がすると仰ッて」。
「あら、ま、どうしたら宜いだらう」。
如何にも非常に困ッた樣子です。　乳母にハ何だか分解りません。　其内に、よほど妙です、阿輝の顏にハ忽にさッと紅葉が散りまして……俄に心附いた體で乳母を横眼、而も何處やら憤恚の籠ッて居る樣な横眼で睨めば乳母ハじッと見て居る體に、もッと一入思ッたのでしやう、前の晩秋の龍田川ハ初冬の御室となりました。
「乳母、其處を明けて御呉れ」。
乳母が障子を明けに起つ、わづかの間に……はて敏捷い……痒いといふ見得で眼を擦りはじめます。　「あゝ本當に痒いこと」。　が、其實ハ痛くも痒くも無いのです。　眼にもし心が有るならば寃罪の不平を鳴らしましやう。　妙な擦り方もある物です。
「そんなに御擦りあそばすのハ御惡う厶いますよ」。
「なに、大した事でも無いの。　昨日舞踏會へ行く時に風に逢ッたもンだから」。
すこし考へて、
「……妾ももう舞踏會へ出ないの、是から」。
「おや、なぜで厶います」。
返辞も出たくもあり、出たくも無いといふ工合で咽喉の邊でまご／＼して居ます。
「阿孃さま、なぜ……」
「だッて他の物をだまッて持ッて行くやうな西山さんが居るもの」。
「西山さんも毎でも舞踏會へ御出なさいますの」。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「あゝ。其度に妾に向ッて…」

此時の聲は Involuntary Tone 即ち不随意調子とでも言ひさうな調子で、主は低げやうとは思ひませんが、神經に打克たれて(むしろ他の怪を惹くために)何となく低くなります。

「此間から舞踏會へ妾も否々ながら出るやうに爲ッて出て居ると、毎でも〳〵西山さんは他に訝しく思はれるのをも搆はないで幾度も妾と踏らうと騷ぐのだよ。そして惡らしいのよ、昨夜も妾が新らしい空氣を吸はうと思ッて庭へ出ると、月はよく晴れて居たが、踏舞の最中ゆゑ誰も側には居なかッたのに…見ると後から西山さんが追蒐けて來て、ね、…一体あの會處は鹿鳴館で無くッて…そして變に植込の間に小さな亭……亭で、それで錠前なンぞの附いて居るのが有るの。否な處。昨夜妾はもう懲々しちまッた」。

何だか支離滅裂な話。高尙な方々には御分解になりますまいが、乳母は何處やら思當ッたやうな樣子です。實は先刻阿輝が俄に顔を赧めましたので乳母の心にはちと「もてな」の考が浮かびましたが、やがて其後の阿輝の話を聞けば全く西山をば憎んで居る體ですからやうやく疑念も晴れました。しかし、其外に何の原因が有ッて阿輝は龍田川を見せたのでしやう。それが此拔目の無い乳母には第二の疑惑になりましたから兎角それと無く問正さうと思ッて居ます。

「舞踏なンぞ一體つまらない物よ。そして幾人も一途に飛跳るンだから、さア酷く塵埃は起つ…呼吸器だの何だのと言ッてる御醫者さまが其中では平氣で居て、そして、あの、乳母、西山さんなンぞも往來で砂塵の起つのに逢ふと、手拭で鼻を隱して居ながら那處ではだら〳〵汗をかいて、せい〳〵息を吐いて…本當に野蠻のありさまだヨ」。

「坊主が憎ければ袈裟まで憎い」。西山を疎む論鋒は直に舞踏會の方へも向きます。非常に便利な論鋒です。彌兒も之をば破れません。

乳母は膝を進めました。

「阿孃さま」。

「え」。

「けれど旦那さまは…何ですよ…西山さんを大層御贔負に爲さッて

「左樣だよ。あの人は世襲財產も有る、立派な有爵の人だとばかり仰ッて…だッて昨日の新聞にも『人爵は天爵に如かず』とあッたね。財產ばかり有ッたッて、品格ばかり有ッ

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

たッて、尸位素餐は…は丶丶丶、ねェ」。

なるほど語氣も餘程大人びて來ました。弓之助に濱邊で御土産を强請ッた時とは全で雲泥の相違です。　親が喜ぶのも至當です。

「尸位素餐の人よりは身を扳いて世を渡る人の方が、ねェ」。

れ丶辛うムいます。言外の寓意は次第に幼馴染の意中の人の方へ向いて…その心根を思遣れば乳母も片頰に笑を含む。すると阿輝は悟られたかと又顔は龍田川。　この時悟られなければ何うです。　やはり夫では滿足しません。　悟られるまで推付けて悟られたと知ッて驚いて、そして嬉しく思ふのが眞正の情愛を外へ洩らす時の有樣です。

「その譜とやらも御大事の物でムいますか」。

阿輝はぐッと詰ッた樣子、

「別に…だが…まア」。

「御兄ィさまの(弓之助)」。

「と云ふ程でも無いが…」

「乳母は見詰めました、阿輝の顔を。　阿輝は背けました、慚ぢた顔を。

「宜いよ、もう、仕方が無い。　兄さんに上げやうと思ッた歌を實はあの譜でもッて…」

跡の殿は微笑です。　その姿の罪の無さ、微笑を乳母の眼に傳へて後は何も無い膝の上を、さも何か有るやうな有樣で切に撫でゝ眺めて居るばかり。推量れば此時の胸の内、さぞかし懶惰者の脉搏も感情に督促されて疾拍子を打ッて居ましやう。

「それで思出しましたが、御兄ィさまは今頃は何の邊に居らッしやいましやう」。

「地中海あたりを行くと仰ッたから…地中海は繪圖で見ても海どころか、大洋と言ッても好いほどな大きさだよ。」

「れや左樣でムいますゥ。　おあぶない事でムいますね」。

「なぜ」。

「もしれ落ちなさッたら」。

「れや否な…落ちたらなンぞとッて。　何落ちる事が有るものゥね、海軍の人が。　そして那處は左樣風もはげしくないわ」。

「まアよく御存じでゐらッしやいますこと」。

乳母の眼は直に壁の輿地圖に向いて其後が阿輝の顔へ回ります(さゞし笑を含んだ景色で)。　そこで又愛らしいです、阿

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

輝の返辭は口の裡、
「でも……仕方が無……」
とばかりで跡はまた眞面目な調子、
「歐羅巴の地中海……あゝ"めぢたアらにあんしィ"」。 でも巧く胡麻化しましたよ。
可愛相に巣立の雌鳩は雄鳩が非道の鷹に撲たれて存亡も分解らなくなッたのを知りません。 皮膚病の診察では有ませんが、外部の徴候で察しても、雌鳩の胸にはたゞやがて雄鳩と比翼になッて有頂天を翔らうとの考より外は有りません。
夫を見れば小さい時から附從ッて居る乳母のうれしさ、徒に感情を共にして居るばかり。今日の二人の會話の中に既に雄鳩の運命を言當てゝあるのに氣が注きません。 氣が注きません處へ何か急に父親の十五郎が阿輝に言ひたいことが有るとて
下女が來て阿輝を呼びますので、何心なく出て行ッて父親の室へ入ッて見れば、ま、母親も其處に居て、それで切りに泣いて居ます。(跡は言はずと分解りますが)、
「おて……お輝……なにはなにして……お輝まア」。
何を言ふのだか分解りません。 たゞ左樣いふ父親の唇はぶる〳〵震へて、顔が蒼醒めて居るばかり。そして又之と同時に、母親は何とも言はず打臥して仕舞ひます(もッとも袖を顔へ當てゝ)。
阿輝の不審顔に父親も辛く結となり
「弓之助は、阿輝、地中海で……」
同時に阿輝は眼を瞬る。同時に母は聲を洩らす。同時に父は變に笑ふ(是は悲しさの餘に出る笑で)。……三人の胸は渾べて無茶苦茶。
「……身を投げた」。
聞いた丈ではまだ耳も信せられません。
「え」。
「身を」。
「身を」。
「うン」。
暫時は無言。 濱風は鷗の聲

家政要錄

小供の育て方　其三

總て小供の病氣は母親御自身に看病して、かりにも熟練な

乳母の外は召仕に委托せぬが肝心です。心切なヿも注意のとゞくヿも御母さんに及ぶ者はとてもありません。母親の眼は我が小供の欲するヿを見破るヿは實に鋭きもので外の人には少しも悟れぬヿを容易く悟ります。これは子を持つ人を見れば直にわかります。

病に罹りたる小供は別して物音に驚くものにて、どんなによく眠てゐても突然に物音がすると直に目を覺まし泣き出しますから小供の病人に限ッたヿではありませんが別して病室を靜かにして耳話をせず音のする衣服など用ひず立居を靜にし病室に入用な品物は其塲に据ゑ置き、なるたけ動かさぬやう、火鉢に炭をつぐにも指でつぐがようムます。又病室は少し暗くして置き顔を日向の方又は燈の方に向けず、そして被衾は輕く暖なケットの樣なのがよろしいです。

馬脾風。　前號に御約束した小供の病氣の御話ですか諸病の内で馬脾風一名をジフテリヤと云ふ病ほど恐ろしい者はムいません、なぜと申に他の小供にこれほど傳染り易い者はないし、それに始めて罹ッた時から死ぬ迄の日數が大概一週間内外です。まづ馬脾風の初めは熱が出て顔色が赤くなり、呼吸は遲く苦しげになりて、動くと常もと異ッた喘涸れた咳嗽がでます。此時分は醫者の方で初期と申て馬脾風の起り初めです。此の時が過ぎますと一層喘涸れた咳嗽（同じ樣な咳嗽が麻疹の初期にも出ます）が強くなり、呼吸は益々喘々いッて皮膚の色は青白く變り斑點が出來、眼は衰えて瞳孔がひろまり渇がきます。かやうになると馬脾風の第二期になッたのです。二期になると最早救かる小供は少ないのですか、今一層進みますとゝても助からぬ第三期に遷ります。そして第一期から第三期迄の時日は大概五日です。

前申す如く此病はなにしろ四日か五日で死ぬ病氣で而も第二期になると治り難いのですから是を治すは早いが何より肝心です。ですから醫者が間に遇へばそれほどよいヿはありませんが田舍などでは急の間にあはぬヿのあるものですから一寸療治と扱かひ方を申ましやう。馬脾風と見たらば大人の拳位な二つの海綿（なければ手拭）をヤット手を入れてをける位な湯に浸し其内一をゆるくしぼりて小供の咽喉にあて二ッの海綿を交々引換えて咽喉が赤くなる迄大凡二十分間は斷まなくあて換えますと汗が出て來ますが咽喉を暖めるヿはこれでやめて發汗せざるため温な牛乳の湯を呑ませるがよろしいです。すると咳嗽も餘程うすらぎ呼吸もらくになり

ます。　衣服はフランネルに限ります、そしてケットで暖に巻いてれき室の内は暖にして寒い風をいれぬが肝心です。　又醫者の處方を得れば一番よいですか若し得られぬときは左の藥を用ひるがよろしい。

吐根酒　三匁　篤爾舎利別　五匁　水一合

をよく混せ合せ振り動かして十分毎に杯に八分目ほどづゝ呑ましめ、若し嘔吐を起す樣になりたらば同し分量を二時間毎に呑ますればよいです。

若しこれでもよい方にむきませんでしたらば溫湯で浴させるがよろしうムります。湯から出したらば直ぐよく拭きて直ぐフランネルにて纒ひ寢床につれ行きてケットで包て靜にねさせるです。　食事は粥か葛湯の少し溫なものがよいです。　通事がなければ通事藥を呑ませなくてはいきません。が、しかしカンチヨーするが一番よろしい。　此病の小供をねかしてある室へは決してほかの小供を見舞にたりとも入れてはなりません。

親の子を愛するは天性でありまして愛さない人こそ實に不思議ですが、然し母親の愛情といふ者は實に不思議な勢力のある者で、第一御小供衆の一寸した病氣や怪我を即席に治しますとれどんな大醫でも及ひません。若し橡から落ちて皮でもむきましたとき御母さんが一寸と甜めますと唾に一種の藥を調合しますから痛は直き去ります。若し乳母が坊チヤンの御機嫌を損ッたとき御母さんが一口おき丶になると中裁が苦もなく出來ましてなかよしになります。若し又小供心に不滿なとがありまして酢でも蒟蒻でもいかぬ時でも御母さんが奇態な眼附をして、柔和い御聲で、力の這入て這入らぬ御手で慰めますと直に御機嫌が直ります。又馬鹿な乳母めが何ぞ恐い御伽話をいたして夜分大層恐怖けましたときに御母さんの御胸は堅城鐵壁の如く、御腕は百方の甲軍より強く、御聲は宮商角徵羽の合奏よりも愉快に御子さんに思はれますのは何だか魔法でもおつかひになるやうです。　實に婦人方は一種奇態な愛と云ふ天賦の魔術を御存なのです。そして此奇術をつかひますればどんな頑固な小供の心でも容易く動かすとが出來まして恐らく古からやりそこなひはありますまい。　いかに淑女の方々、愛の勢力は大した者ではありませんか。　そしてこの愛情と申す魔法は母親さんより外誰も決して會得したものはありません。天より與へられた婦人方の專有特許であ

ります。されば小供衆の教育はどこまでも御自身になさるべき者で他人に委任すべきものでないとが、イヤサ流行の奴婢となりて裝飾に日を費さんよりはいとも尊とき國家の母なるとが淑女の御名譽で、御勝利で、御本意でありませやう。

習慣は第二の天性と誰やらも申た通り一度浸み込みたる癖は中々抜けぬ者で世間にはとんだ癖がついて難澁する人が隨分澤山あります。　習慣の中でも小供の時にいつた癖は容易に抜けぬもの、生涯つきまとふもので、小供が活潑になるも、因循になるも、行儀よくなるも、不行儀になるも、從順になるも、剛愎になるも皆な母親の家庭教育の善惡によるものですから子を持たる丶方々は深く御注意なくて叶ひません。

前申上た通母親專有の愛情は大層な者で、小供を育てるには之に優るよき者はありません。どこまでも柔和く深切に教へ導がよろしう厶います。　裏店の女房さん達は責檻こそ教育の最良なる方便と心得違てイザともすると無垢の小供を「エー此餓鬼め」とか「尼ナヨメ」とか申て頭をピシヤンとやりまして親切に諭したり、賴だりしませんから小供の方でも御覽なさいどれもこれも剛愎で「此の尼めひどいネ」とて打さうと思ひますとベツカコーをしたり御尻を叩いたりして逃げます。　之と替りまして「御濟や御前そんなおイタをおしでないよ」と柔かに申聞けますとハイと申て直にやめます。　御覽なさい小供の時分病氣で長く母親に大切に親切に育てられた小供は百が百迄親孝行で親を敬ひ親を愛します。「愛を買ふには愛を以てせよ」とは此の事で厶います。　實に小供を育てるには愛に勝るものはありませんが、然し愛とはアマヤカス事では決してありません。愛中自から威あるものでなくてはいけません。　さてどうすれば是が得られるかは次號に申上ましやう。

弄物から病氣。　先頃香港で小供に一種の呼吸器病が流行たさうですが、これは全く其頃ラッパの弄物が流行た爲咽喉を害たのださうです。　たゞこればかりでなく弄物が小供の精神の發達に及ぼす利害も大した者ですからよく注意しなくてはいけません。

母親「御梅や御前なにをしてゐるの」　小娘「あのネ妾は……御母さんの新しいシヤツポのネ花に水を與てゐるの……あんまり乾いてゐて枯れるといけないから」

世の流行にも種々ありて昨日の新樣は今日の舊態と變ずる如き唯一時の雲烟過雁に類して利害を後に留めざるものあり。　或は流行の一般に行はれ一國或は一種族の風俗となり世々之を持續けて失ふとなく利害を社會に及ぼし後世子孫に傳ふるものあり。　前者は恐るゝに足らず後者は實に恐るべし。　今日我邦の流行後者に屬するものあり。　其利害に關してハ今日に於て研究し置くべきと少からず。　頃英國の碩學フラワー氏著す所の一論文を讀むに後者の流行に關して論ずる所我國の今日に切當るを覺ゆれば今其要を摘譯して茲に掲ぐ。

人工の畸形

甚いかな流行の勢力や其強きと專制の君主の如く世人の之に制せらるゝと奴隷も啻ならざるなり。　全甌無缺の身體に傷を付けて自ら喜ぶは野蠻の種族より文明の人民に至るまでおしなべて流行する處なり。　今余が茲に述べんと欲する處のものは一個人各自の風習にあらずして社會一般に流行するものに限るなり。　流行といへは變更の意味之と共に伴ふものゝ如しと雖必しも然らざるものあり。　何樣の流行も野蠻國に於ては文明國に於てよりも永續するものなり。

又身體に關する流行は衣服の流行の如く時々の人氣の移り變るに從ひて變ずるものにあらず。　衣服の流行の變り易きは沙翁が「流行は人間よりも多くの衣服を着古す」と歎ちしを觀ても昔も今の如くなりしを知るべし。　然るに身體に關する流行たとへは文身の如きハ一旦之を施したる以上は如何に之を除き去らんとするも得べきにあらず況んや流行なるものは其實他人の風俗を眞似るより起るものなればかゝる流行も前人逝きて後人繼ぎ累世絶ゆるとなきに至る。　身體に關する流行の起源は茫乎として尋ぬべからず。　或は宗教又は古來の迷説と相關係するものあらん。　かやうなる流行は一時に傳播し又世々永續するものなり。　或は唯漠然健康の術と思ひ誤りて爲したるものあらん。　大抵は當時の風俗の認めて美容となす處のものに關係あるべし。　其起源は何にもあれ一般の風俗に適合せんとする願と衆人の打て替つて目立たざる樣との心掛ハ流行を永續せしむる主なる考なるべし。　之を要するに流行ハ人眞似より來り人眞似ハスペンサー氏のいへる如く二の異なりたる考より來るものなり。　一ハ人を尊ふの餘り其風采に眞似ると一ハ其人と等しくならんと思ふより來るものなりと。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

此流行ハ唯人間界に行ハるゝのみならず、人間ハまた其家畜の上に此流行を及ぼしたることと東西今古に通じて其例少からず。　今其一二を擧ぐればアフリカ洲のホッテントット人ハ牛の兩角の規則正しく生へるを面白からず思ひまた犢の中に兩角を捻ぢおくなり。　されバ生長の後にハ畸形の角となるといふ。　又此國にハ多岐の角を戴ける羊あり是ハ子羊のときナイフを以て角を幾個にも割きおくなり。　其他犬の耳馬の尾等に人工を加えて種々の畸形を作るハ其例枚擧に遑あらず。　是等ハ姑く省きて人間の畸形に説き入るべし。

今本題に入るに就き如何なる順序を追ふべきや余ハ毛髪皮膚、爪、等の表面に止まりて其結果の輕きものより次第に内部に説き入り其結果の隱れて而も恐るべきものに及ぼさんと欲す。

頭髪の長短及び其結ね方ハいふまでもなく其色合に至るまで時の流行に連れて變化するものなり。　太平洋西偏の諸島に於てハ島民ハ其海濱に多く産する珊瑚を燒き其灰を漆の如き黑髪に傅けて黄色に變ずるの風習あり。　極近年まで西欧洲の婦人も此方法を用ゐてゴルデンヘア（金色髮）を作ることを務めたりき。

燧刀或ハ骨貝製の刃物より外に善良なる器械のなき國々の野蠻人ハ其手數と苦痛を忍びて頭髪を剃るの風習あり。　蓋熱國に於てハ蓬髪を蓄ふるより寧ろ剃髪するの清潔なるに若かずとの考もあらん。　又實際爽快を感ずることならん。　フイジー群島に行ハるゝ風俗ハ正に文明諸國のと相反するものあり。　婦人の頭髪ハ五分月代若しくハ剃落すを常とす。　然るに男子の中身分あるか或ハ通人ともいふべき人ハ頭髪を結ぬるにあらゆる豪奢を極め之が爲め心を勞し時を費すこと夥し。

〔未完〕

急病の手あて

婦人方ハ一通り病人の扱ひ方や急病の手あて方を御存ないと大層御不都合で（尤も都會に御住ひの方ハ左程御不都合でもありますまいが）何にもかも御醫者まかせでハ不便なばかりでなく、不經濟でもありますし、又肝心な御病人の御全快なさるも遲いし、又死なずと助かる者を見す〳〵死なしたりしますから素人で出來る丈の一般を御習ひなさるのハ外の御稽古と同じほど肝心でムいます。

●產婦の眩暈　御產のあとなどには折々めまひのするものにて甚しきは死ぬともありますが、かやうな御婦人は常に成るたけ動かずに靜かにしておゐでるがよろしう厶います。眩暈のしますときは熱い酢を嗅がせ、若しありませんときは鳥の羽を燒きて其臭をかゞせればよろしう厶います。　が然し「スメリング、ボットル」を御持參ならばそれにましたとはありません。

●腹痛　御腹がひどく痛みて堪えられんとがありますが、その時は瓶に湯をいれ濡れ手拭で卷きこれを肌にあてゝをればなほります。瓶が間に合はねば瓦を燒いて濡れ手拭に包むだのでも又は懷爐でもよろしう厶います。

●嘔吐さうな時　は左肩を下にして横に高い枕をして靜に御寢みなさい。　尤も人によりては打伏にねる人もあります。

●擦傷　はスキ油を塗り附け、若し大きければ上に綿を薄く覆せて置けば治ります。

●火傷　水腫になりましたら針で穴をあけ水を出し、胡麻の油を塗りて其上に薄く平に延した上等の綿を貼り片布でまいておくのが一番よい療治です、尤も綿は毎日替へて其都度湯にて傷をあらひ油をぬるのです。

●爪まはり　とて爪の周圍がはれて婦人方の大層難澁なさる腫物を治しますには少し温な湯の中に指をつけて置けば痛は去りますし治るとも早う厶います。若し膿みましたら髮剃で切ッて膿を出し、御退屈になる迄度々湯に浸し。湯から御出しになりたらばスキ油を塗て御置きなさい。

●骨の折れたる時　は折た處の後先を二人で引張ますと骨がもとの樣につながります、そこで板を兩方からあてゝ布なり、紐なりで括り、さてそれから水でどん〳〵冷すのです。　此の療治は手早くやりませんでは熱が出ますからいけません。

●次號には溺死たり氣絶したりした者を蘇生らせる法、切り創の療法、咽喉に骨や餠のかゝりたるを取去る法、等を述べます。

時の流行

衣服　目下非常に流行する下着は小紋更紗です。　淑女方の羽織は主に銀鼠すなはち葡萄鼠の縮です。　五十歳以上の婦人方の羽織には(一寸した場處で)栗梅の絹紬或はそれにすこし茶ガヽッた羽織です。

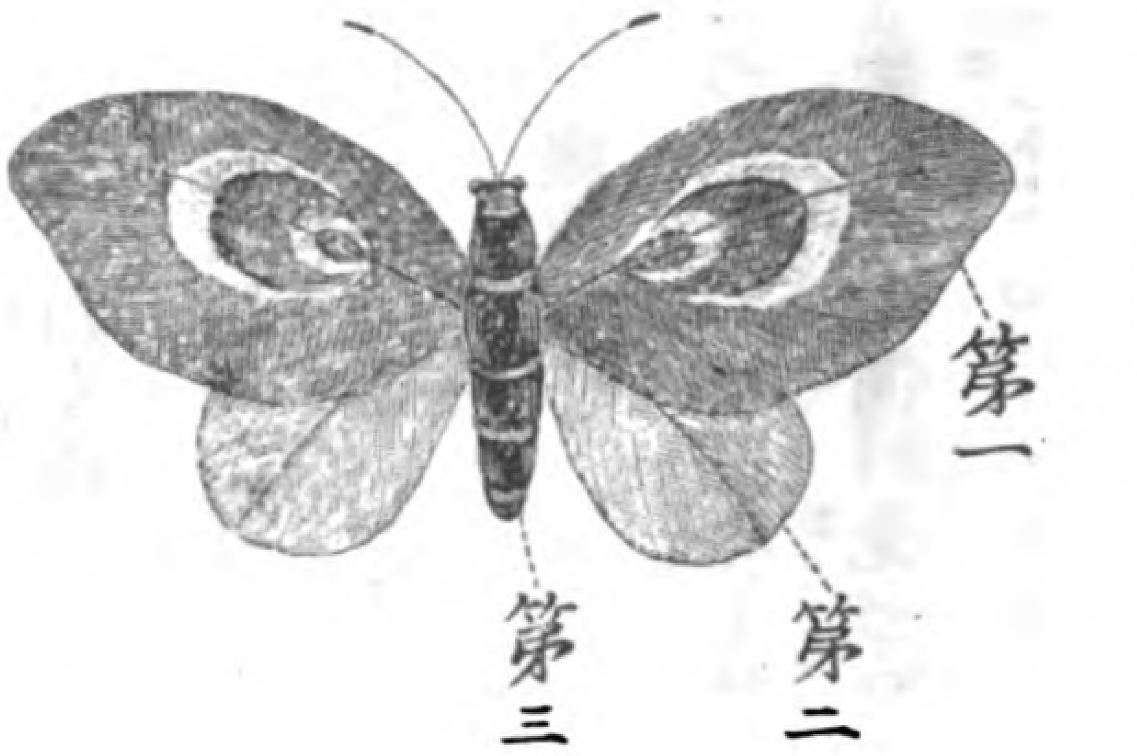
今年の夏物の新形は可なり出來ましたが、いづれも上等の

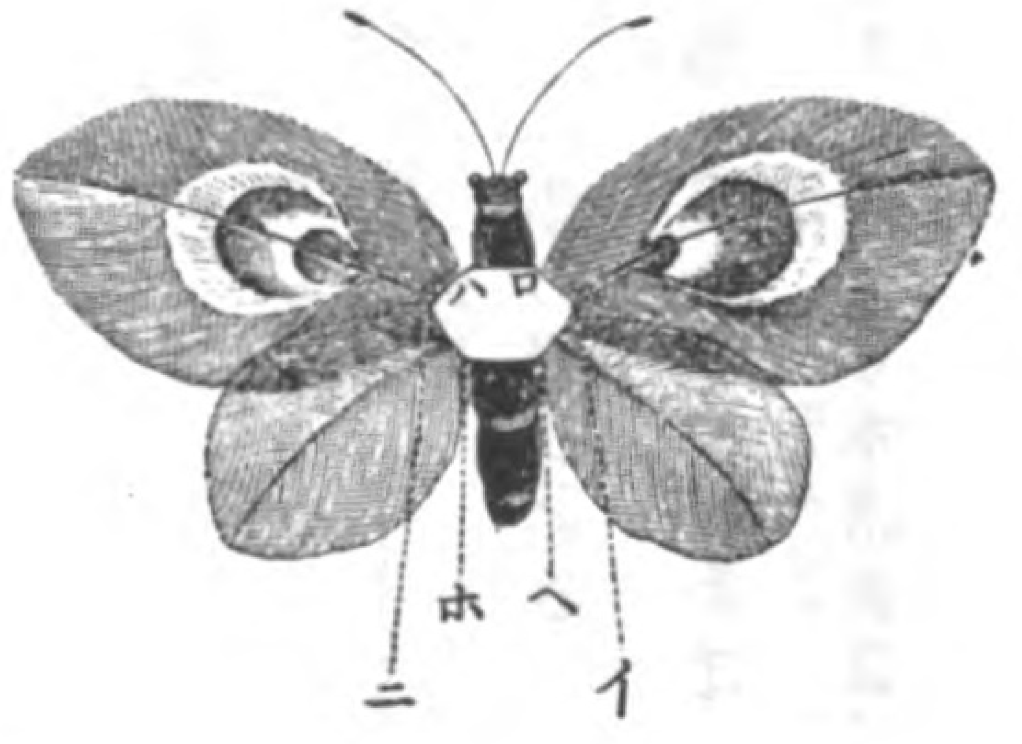
趣向とは申されません。　そこで人氣もまだ何處へ向くか十分に分解りません。

装飾品。　手拭は次第々々に絹が流行出しまして、そして人氣の多いのは中等あたりの物で、形の混入った物も淡薄な物もさして人氣に酷い相違は有りません。　香水は米國製一瓶(二オンス)七八十錢以上三圓ぐらゐまでの間がもッとも賣れます(たゞし中等以上の人へ)。　麝香は段々人氣が少なくなります。　婦人方にでも紳士方にでも銀延の烟管が太層行はれさうです。又少し彫刻のあッさりした方が評判が宜しいです。　烟管筒は革類の物がすこし廢れて來て贅澤な人は一昨年發明の玻璃の糸織の物を用ゐて居ます。　目今の處ではさびた友禪に鹿の薄革を付けた筒がまづ可なりです。　烟草入も色々です。　紳士の持つ烟草入は大抵"リッチモンド"の"フラグラント"を入れるためですから矢張り從來の護謨の物です。　魯西亞革の巻烟草入、ちと人氣が減りました。婦人方の烟草入はなるたけ小形で更紗の摸様が上向です。紳士の釦鈕は次第に純粹の寶石が時を得るやうになりました。　この頃新製の水晶擬の釦鈕はよく用ゐられます。黒曜石、孔雀石などの物には人氣が有ります。　青貝には無くありました。　襟は何とも定まりません。　象牙製の物はまだ世に行はれません。　手首を長く出すのは流行りません。溢く些し出した方が一般です。　巴里では此頃男子の服の直衣の胸はますます廣く開くやうになりましたので、日本でも次第に白い廣い胸が流行して來ます。　大きな襟かざりは段々すたれます。　その代り小さな、黒、橄欖などの物が多く用ゐられます。　婦人服は此間出た紐育の新様とて兩腕と袴へ掛けて下り藤を染拔いたのがやがて出ます。　靴は爪先に化粧のあるのはそろそろ廢れて來まして、編上もまた勢力が薄くなりました。

鳥羽製蝴蝶簪又は花簪。

是はたやすく出來て而も決して六箇敷い事は無く、そして甚面白う御座います。　蝴蝶簪に用ゐる鳥羽は孔雀の尾の寶珠の處で第一圖のとほり寶珠を蝶の羽の如くに二枚切脱きます(第二圖)此外にまた第二の羽、これは孔雀の胸の羽が至極よろしく、是もまた左右二枚切るので、そこで蝶の羽四枚は殘らず出來ました。　扨それから蝶の胴、是は本物の蝶の胴だけの長さの筒を天鵞絨で縫ひ、その中には綿か、毛を入れて脹





らせ、殘らず縫合せて後、第三のとほり處々を舶來の極細い絹の黒糸で括ります。　それから、木棉糸を適宜の長さに切り、之を護謨へ浸して固くし、それを頭に植ゑれば圖のとほりの觸角が二本出來ます。　扨これで物は出來ましたがそれでは時に羽が落ちて仕舞ふ事もありますので、そこで圖の樣に裏へ六角の厚紙を附けませう。　もッとも體裁をよくするには此紙へ黒絹を張ります。　そして紙の「ロ」「ハ」「ヘ」「ホ」の角を胴へ縫付け、「イ」「ニ」の角を大羽に縫付け、「イヘ」、「ニホ」の間の適當な處を小羽に縫付けます、　そして此紙の處へ針金を附け、普通の花簪のやうにして用ゐれば中々美事な物が出來ます。

花簪も全じ法で出來ます。

麥藁の夏帽子に角のすかしを粧飾として付けるのを好む風習は既に一昨年の夏よりはじめて出來るのですが、今日は書生社會に大層な流行になりました。　去年あたりは色鉢卷のものが大分はやりましたが、今年は大きにすたれました。　若い紳士は中高の帽子をかぶる風が行なはれます。　氣取ッた人は亞米利加形ッパビロに白紗の鉢卷をひらつかせます。　非常に美事な新案です。

化粧

化粧藥えらみ方

世間で賣る化粧藥は色々ありますが、その中に炭酸マグネシアを含んで居るものは殆有りません。　然るにマグネシアは肌理を荒びさせる性質を持ッて居る物ですから、其樣な化粧藥を用ゐて居ると遂に折角うるはしかッた絹の肌も呉絽の肌となッて仕舞ひます。　それ故、淑女の方々が化粧藥を御用にならうといふ時にはまづ其中にマグネシアが有るか無いかを試驗なさらねば爲りません。　その試驗法は左のとほり、決して六箇敷はありません。

化粧藥一匙へ檸檬水二三滴を入れて、すこし交加れせ、其處で沸騰が起ればマグネシアのある證據です。

惡い化粧藥の爲に肌を損じたのを恢復する法。

前のとほり惡い化粧藥を用ゐるために肌が損じたのを療するに左の法が一番宜うムいます。藥品が容易に得られるので馬鹿になさってはいけません。

リスリン　十匁　硼酸　三匁
橙花水　六十匁

右の合劑をこしらへて朝と夜と、日に二度づゝ塗れば直に元のとほり柔い肌になります。

次號に掲載する化粧法品々

手を白く滑にする法。

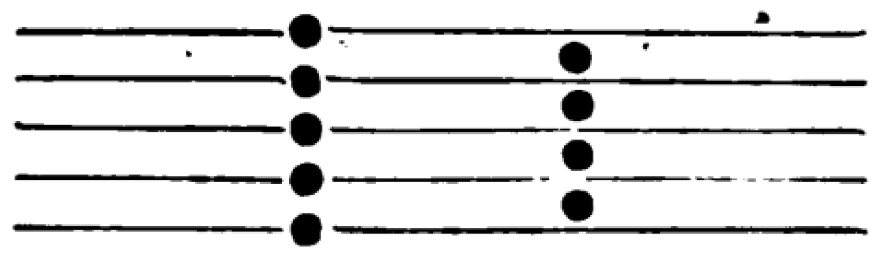
日に燒けた手を白くする法。

文藝美術

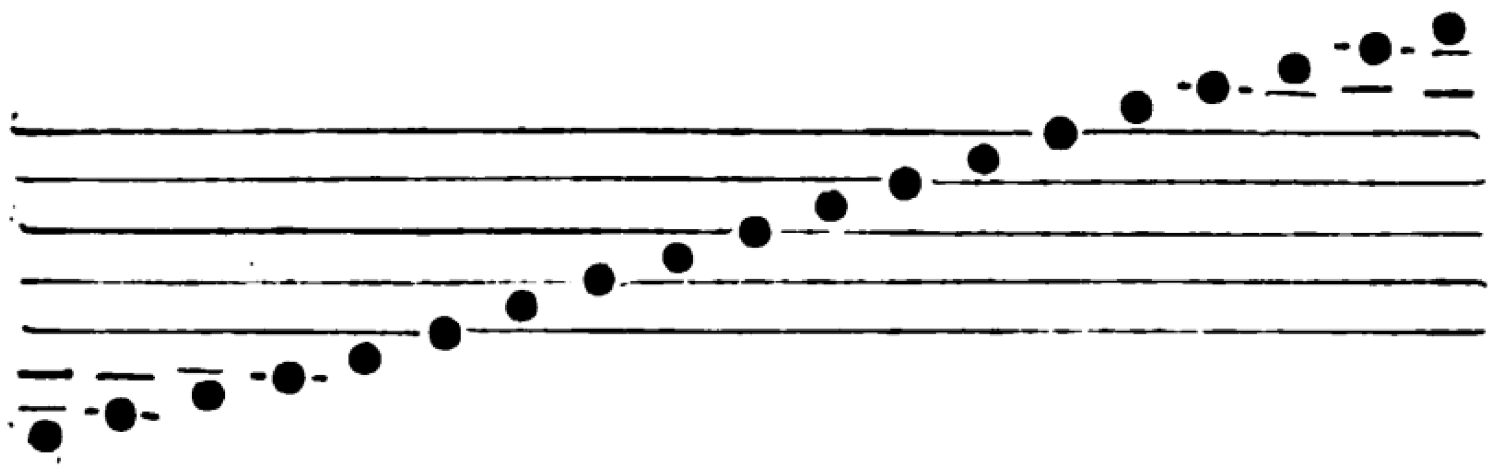
樂典初歩　夢の屋ゝをる

音階についてはまだ申し述べたい事も澤山ですがあまり長くなりますから今回は先づお預りとして是より本譜表に移りてお話致します。

音樂の本譜表を構成るに先づ要用なる者は次に圖せるが如き層疊平行に布設たる五條の水平線であります。



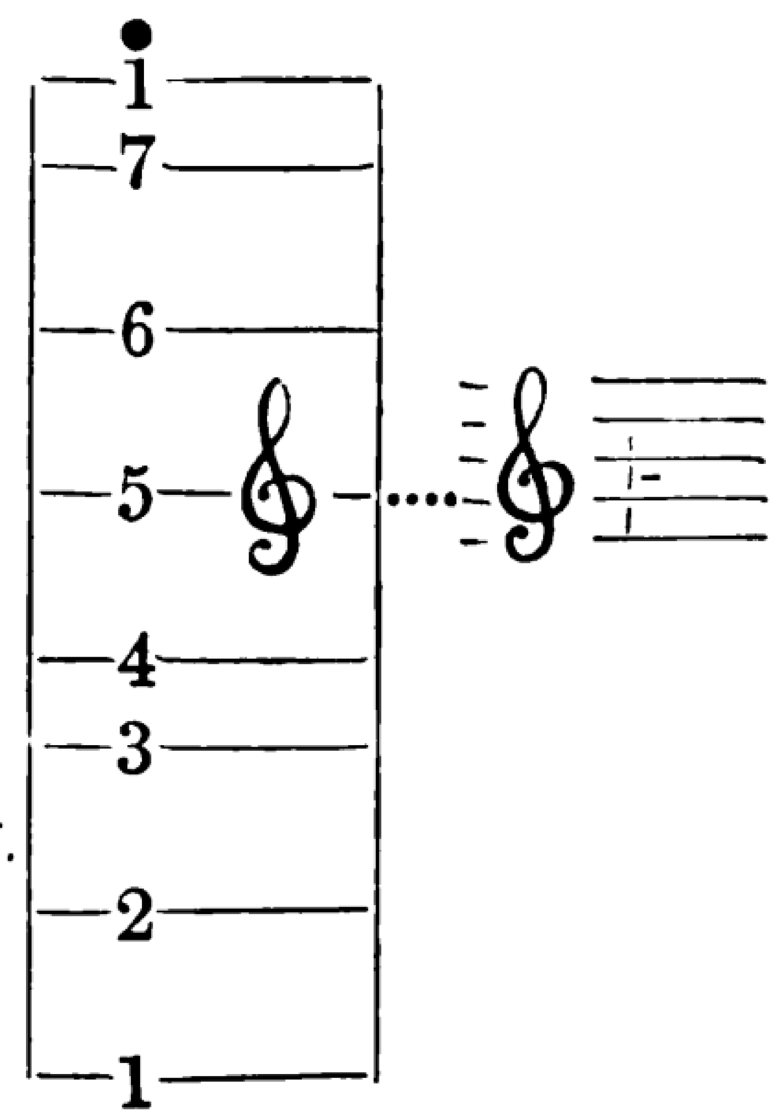
上の五線を「譜表の基線」と申します、譜表の基線には今上の圖で點にて示す如く總計九個の音符を置く事が出來ませぬ、シテ第五線上の音符より更に高き音、又は第一線上の音符より更に低き音を要する場合には基線の上下に短線を用ます。譜表に用る基線即ち長線はたゞ五線なれども增加線即ち短線は必要次第で自由に增設ます。左に一例を擧ます。



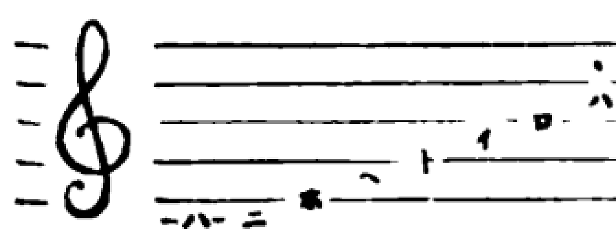
上ノ第三間　上ノ第二線　上ノ第一間　上ノ第一線　上ノ第一間　第五線　第四間　第四線　第三間　第三線　第二間　第二線　第一間　第一線　下ノ第一間　下ノ第一線　下ノ第二間　下ノ第二線　下ノ第三間

譜表の基線及び增加線の稱呼即ち數へ樣は必らず右の圖の樣に申ます、シテ圖中の點即ち假音符は下にあるのは低き音で上にあるのは高き音です、これは譜表線の數へ樣にて誰にもしれますけれども其調名即ち(イ)(ロ)(ハ)に至りてはどこが(イ)だかどこが(ロ)だか中々分らぬから一應(ハ)調音階の諸音を譜表線上に移してみましやう、否音階の諸音を

移すよりも先づ彼の樂鍵を移して見ましやう。樂鍵は譜表上に於ても亦(ト)の調名を示すのが其作用ですからこれさへ移せバ他の諸調名は自然と分つて參ります。



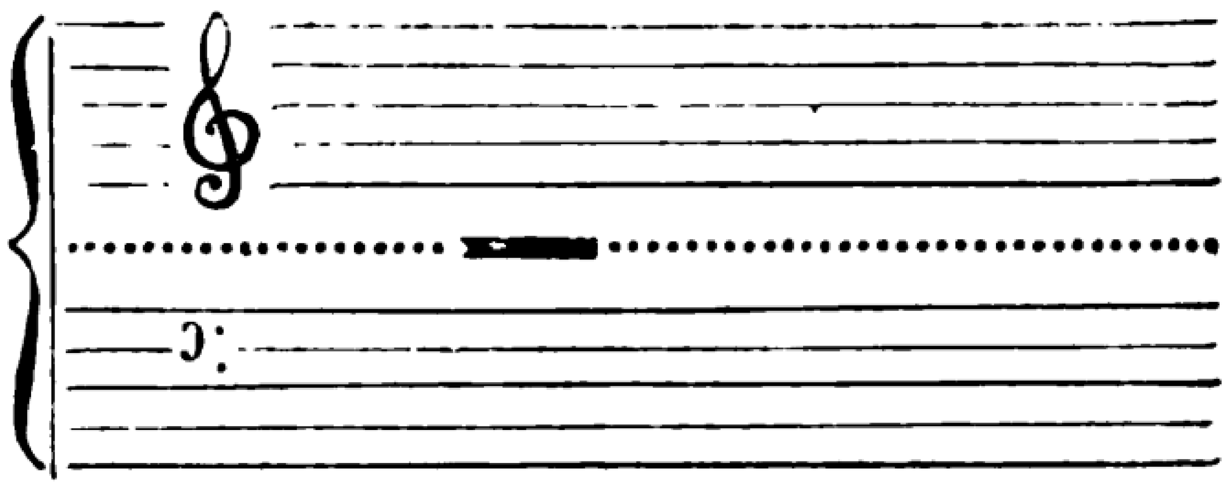
御覽の通り樂鍵は譜表線の第二線上にありますから此線上の調名は(ト)です。　既に譜表線上に(ト)の調名を發見せし故(ト)より推せば他の線上、線　間　の諸調名ハ直に知れます。が、矢張一應音階の諸音を移しましやう。



上圖の如く(ト)より上の三音即ち(イ)(ロ)(ハ)の三音を順に移ば(イ)は第二間(ロ)は第三線(ハ)は第三間とあります、又(ト)より下の四音即ち(ヘ)(ホ)(ニ)(ハ)の四音を逆に移せバ(ヘ)は第一間(ホ)は第一線(ニ)は下の第一間(ハ)ハ下の第一線となります。以上は(ハ)の音階を移したのですから第四線以上ハ空位になりて居ますが、若し第三間の(・ハ)に次げる(・ニ)(・ホ)(・ヘ)の三音があつたあらば(・ニ)は第四線、(・ホ)は第四間、(・ヘ)は第五線に其位置を占むるは勿論です。

上圖に於ては調名の(イ)(ロ)(ハ)を譜表線上に記せし故各線と各間の調名は苦も無く分りますか實際の樂譜は音符と申す記號にて樂曲の旋律を種々樣々に表しますから其表された各音の調名を咄嗟に識別ることは初學のかたには頗る困難の一事であります、左れど初學の方々ハ凡そ譜表の下の第三間より上の第三間迄の諸調名を夙に能々御諳熟あらまほしく存ます。

さて增加短線を有てる「五線の譜表」は單音の樂曲若くは複音の歌曲等を記載するには固り充分にて不足ハなけれども三重音唱歌若くは四重音唱歌の如き多種の聲音を表記すには此譜表では甚だ不充分ですから此等の歌曲を記すには別に十一線ハ譜表即ち大譜表と申すものを用ひます、但十一線を其儘用ふるときは視別るに如何にも混雜しいから通例中央の一線を短線に縮めて上下二個の五線として用ひます即ち次の如くです、



前記大譜表中に示したる二記號は即ち音部記號と稱するものにて、音部記號は全く樂鍵と異稱同物であります。　諸君既に御心つきでしやうが上の五線は畢竟前に述べた譜表線と同ですから音部記號即ち樂鍵は(ト)の記號が記してあります、シテ下の譜表は只今新規に成り立つたものですから音部記號も亦た新規の記號が記してあります。此音部記號は下の五線の第四線上に位置を占めて此線上の音調名が(ヘ)なる事を指示します、今之を標準として他の諸調名を求めば其線上に於ける調名は第一線(ト)、第二線(ロ)、第三線(ニ)、第四線(ヘ)、(即ち音部記號の所在)第五線(イ)であります、又其線間にある調名は第一間(イ)第二間(ハ)第三間(ホ)第四間(ト)であります。

又大譜表上に樂曲を記載するの法を概して申せば其高音(女の聲)に屬するものは専ら上の五線に之を記し其低音(男の聲)に屬するものは専ら下の五線に之を記します、故に通例(ト)の記號を高音部記號と稱し(ヘ)の記號を低音部記號と稱します。

偖又「オーガン」「ピアノ」の如き有鍵樂器にて大譜表上の樂曲を奏するには右手を上の五線に充て左手を下の五線に充て、彈奏ます。

偖是より譜表線上に樂音の長短を表示す記號即ち音符の事を述べましやう。

音符の普通用ふるものは全音符、半音符、四分音符、八分音符、十六分音符、及び三十二分音符の六種であります、シテ其効用形狀等は左の通りです。

第一、全音符は音樂上の最長音を表するものにて其形は楕圓であります。

第二、半音符は全音符の半長音を表するものにて其形は鉛直線の尾を有する楕圓であります。

第三、四分音符は半音符の半長音を表するものにて其形は尾を有する黒圓であります。

第四、八分音符は四分音符の半長音を表するものにて其形は尾及び一鈎を有する黒圓であります。

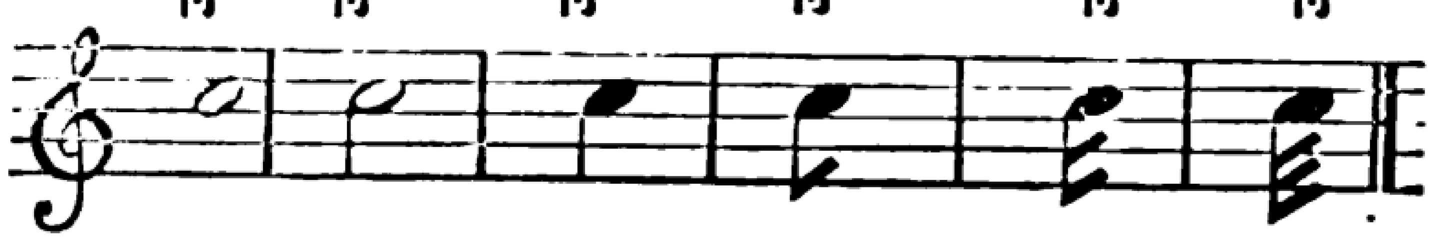
第五、十六分音符は八分音符の半長音を表するものにて其形は尾及び二鈎を有する黒圓であります。

第六、三十二分音符は十六分音符の半長音を表するものにて

其形は尾及び三鉤を有する黒圓であります。

以上六種の音符を左に圖して御覽に入れます。

三十二分音符　十六分音符　八分音符　四分音符　半音符　全音符



さて樂音の長短を測るには拍節をなし、拍名を呼ぶ等種々の方法がありますが其內一番手輕で早分りなのは彼の柱時計の振子に比して計るの一法です。因りて只今六種音符の長さを說明すにも亦た此方法を用ひます。

(1)全音符一個の長さは凡そ振子の四振時間にあたります。

(2)半音符一個の長さは凡そ振子の二振時間にあたります、彼の畧譜に「ダッシ」を用ひた音は丁度半音符に當ります。

(3)四分音符一個の長さは凡そ振子の一振時間にあたります、畧譜に「コムマ」を用ひた音は恰も四分音符にあたります。

(4)八分音符一個の長さは凡そ振子の一振時間の二分の一にあたります。

(5)十六分音符一個の長さは凡そ振子の一振時間の四分の一にあたります。

(6)三十二分音符一個の長さは凡そ振子の一振時間の八分の一にあたります。

さて又音符の固有の長さの二分の一を更に延長せしむるときには之に相當する音符を本音符の次に記して此兩音符を線にて連結するのが正規の記符法ですが彼樣に一々しるすは實に面倒至極で時間も費へますから一種の便法即ち、音符の後に點を附けて表示その方法を用ひます、例へば

(1)全音符の後に單點を附記ることo・の如くするときは此音の長さは全音符と半音符とを合併したもの即ち振子の六振時間に等しきものとなります。

(2)半音符の後に單點を附記するとo・の如くするときは此音の長さは半音符と四分音符とを合併したるもの即ち振子の三振時間に等しきものとなります、餘は之に準じて御賢察を願ひます。

又固有音長の四分の三を更に延長するときには音符の後に複點を記して表します。

音符の事は大畧述べ終りましたから只今より默止記號に移ります。

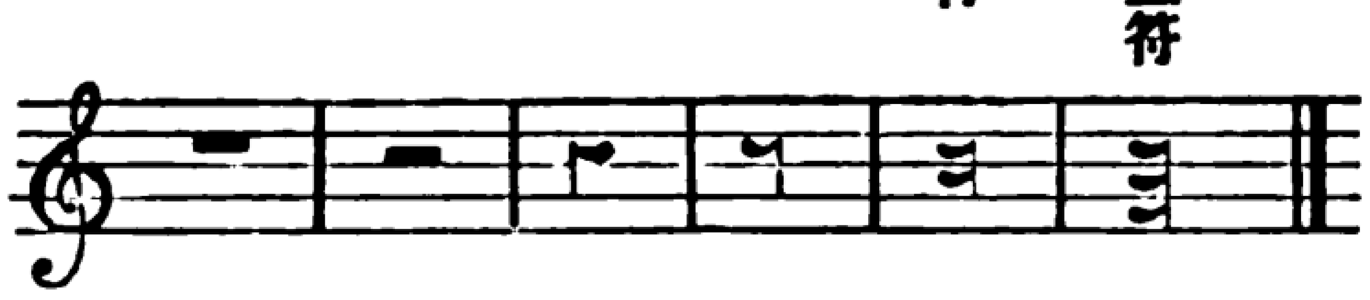
抑も音樂は音の引續より成るものですから猥りに默止ては

曲をなしませんがさりとて徹頭徹尾絶音なしでハ樂曲の句節段落等ハさつぱり見當がつきません、殊ゟ人聲音樂、即ち唱歌ゟ至りてハ唱謠の際に屢々氣息を取るの時間を要しますから樂曲進動上にハ默止即ち絶音する事も亦た必要の一事であります。

默止を表示する記號を休止符と申します、普通用ふる休止符ハ音符と同く六種です

以下六種の休止符を左ゟ圖して御目ゟ掛けましやう。

三十二分休止符　十六分休止符　八分休止符　四分休止符　半音休止符　全音休止符



休止符もまた單附點若くハ複附點を施して默止時間を延長す事が往々あります。シテ其方法ハ總て音符ゟ於ると同一ですから一々贅言ハ致しません。

第一　全音休止符は譜表線の第四線下に置たる一小横畫です。

第二　半音休止符ハ譜表線の第三線上に置きたる一小横畫（次の圖ゟある通り）です。

第三　四分休止符ハ右ゟ向きたる一鈎狀のものです。

第四　八分休止符ハ左に向きたる一鈎狀のものです。

第五　十六分休止符ハ左ゟ向きたる鈎狀のもの二です。

第六　三十二分休止符ハ左に向きたる鈎狀のもの三です。

第十號の附錄の譜はとんだ間違がありましたら謹て左に正誤致します。

Key of D.　〔平調律旋〕

2, 2, 1, 1, 2–0–3, 3, 5, 5, 6—5, 5,　6, 6, 5, 3, 2—0—
タカマドヤ　チノヘノアキノ　ユフギリハ
しづむみの　はるこそなけれ　さくらバな
オモフホド　ツキモルヤドノ　サムシロニ
かげもなき　さーののあかりの　ゆふぐれは
クニツカミ　ウラサビヌラシ　サザナミノ

2, 2, 7, 2　6-5, 5.　3-5, 5,　6-5, 3, 2　1-2—0—
タタシシ　キミガ　アトモ　ノコーサーズ
うつろふ　みづも　みくさ　ゐねーれーば
アーラレ　タマシル　フユハ　キニーケーリ
つきみる　ときぞ　うれし　かりーけーる
ミチニモ　サワグ　シガノ　ヤマーゴーシ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

若葉の月三曲

美妙齋主人

〔譜〕—〔さけ、花よ〕。

第一　薄月。

いたいけの
若葉や　むせぶ。
芽よ　さへ　なみだ。
葉ごしに　まよふ
うす月ハ
けふりを　凝らす。

第二　新月。

いさいけの
若葉をうがつ
にひ月　利鎌。
晃めく　かせに
たわゝなる
腕ハ　ふるふ。

第三　望月。

いたいけの
若葉の　胸に
望月　かゞみ。
いだきて　かくす
こゝろ根の
床しさ　如何に。

沈思

美妙齋主人

一

何ぞ　汝ハ。　こや沈思、
あやしやな。
腕ハ　汝の　ちうらにて
れのづから
下に　組まれ、
首ハ　汝の　重量にて
おのづから
下に　垂れむ。
汝の　呼吸に　吹かれてハ
くもりなき
眼さへ　うすみ、
汝の　足よ　踏まれてハ
のろかなる
舌も　よわる。

正本はむれッと

美妙齋主人譯

「はむれッと」の芝居正本は「志ェくすぴィあ」翁の傑作中の傑作で、既にその梗略は世に出て居ますが、なほ物足りぬ處が有りますもので、今度及ばぬ大膽な考を起し、力のかぎり原文の妙處を存し、猶其上に文体は力めて言文一致体に近づけ、當ッて摧けやうと此をほり試驗して見ました。　原文にあるよりハ些し筆を加へた處も有り升が、然し原作者が苦心した處をば成るべく保存したつもりです。　そして文は從前の日本の脚本よりハ言文一致体に近づいて居ますから時に雅に聞える處が有るかも知れません、それハ習慣に反對する處から起ッたのですから御容赦を願ひ升。　但し、其外の處は無論譯者が責に任じます。　兎角の御批評は看客の御隨意です。　原文を照らし合はせて覽て下さる人が、もし、有るなら譯者も譯し甲斐のある事と心から喜びます、

役　名。

「くろオぢあす」(丁抹の王)。
「はむれッと」(「くろオぢあす」の太子)。
「ぽろにあす」(宰相)。
「ほらしお」(「はむれッと」の朋友)。
「らアてす」(「ぽろにあす」の子)。
「うオるちまんど」(内官)。
「こアねりあす」(内官)。
「ろオぜんくらんつ」(内官)。
「ぎるでんすたアん」(内官)。
「おすてりッく」(内官)。
「まアせらす」(外官)。
「ふらんしすこ」(武士)。
「ばアなアど」(外官)。
「れいのるど」(「ぽろにあす」の家來)。
「くろオぢあす」の亡靈。
「ふおちんぶらす」(諾威の君)。
「がアとるウど」(「くろオぢあす」の妃)。
「おふエりあ」(「ぽろにあす」の娘)。
内官なにがし
僧都なにがし
船将なにがし
使者なにがし

外に、官人、侍女、武士、藝人、穴掘、水夫、使者、家來、下僕いろ〳〵。

塲所――「えるしのすあ」。

序幕　城門幽靈出現の塲。

本舞臺「えるしのおあ」城門の体。こゝに「ふらんしすこ」の番兵たゝずむ。ばァなァど」の代番出て來る。

ば。其處戍るは何者か。

ふ。左樣言ふ者から先名唱れ。姿をとく〳〵と現せイ。

ば。聖体万歳

ふ。さゝ「ばァなァど」どの。

ば。如何にも左樣。

ふ。さて貴殿の謹深さ。定の刻限ちッとも違へず……

ば。今十二時も打ちました。貴殿はもはや御寐なされ。

ふ。有難うムり升。何と、まァ、この寒さは。拙者などれ眞底やと〳〵病氣にもなりさうです。

ば。それは左樣と、今夜の御番、異變は有りませんでしたの。

ふ。おゝいや、鼠も噪ぎませんで。

ば。左樣ならば、御機嫌よう……もしや途で朋輩の「やらしお」と「まァせらす」、二人に御逢ひなされたなら、急いで來いと仰られて。

ふ。しかし、那處にあの足音。はうい駐まれ、何者だ。

（此内「はらしお」と「まァせらそ」二人連立ッて出て來る。

は。此邊の朋輩。

ま。御門の家來。

ふ。や、矢張御兩方。左樣なら拙者は御先へ。

ま。して又跡には何の方が。

ふ。「ぜァなァど」どのが居り升る。左樣ならば皆々さま。

（言捨てゝ「ふ」は寒さに怯む擧動で引込む。跡三人の話になる

ま。申し「バァなァど」どの。

ば。ても仰い、何御用。「やらしお」どのも御出ですか。

や。まァづ其身體だけ。

ま。（「やらしお」は幽靈の存在を疑ふ人ゆゑ、今此處へ來たのは「まァせらす」や「バァなァど」が幽靈の存在を信じて來たのとは違ッて居て、すなはち「身體だけは來さ」ので決して心まで人々と仝じやうで來たのでは無いのです。「まァづ其身體だけ」は其意味を持ッて居る戯の言葉です）。

ぜ。さ、それなら御揃ひで。

ま。そして例のは出ましたか。

ぜ。否、まだ何も出ませぬが。

ま。「やらしお」どのは眞實と思はず「幽靈」などの怪しい物が出るといふのは精神の迷ひ。その樣な考を心に起す物では無い」と鹿爪らしく申されるので、其處で今夜は虚か、實か御見せ申さうと拙者が斯う御仝道いたしました。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

もしも其處で例のが又あらはれて見えたなら其時こそは否應無し、われ〳〵の申した言葉が虚でも無いと御承知なさらう。

ほ。又しても「まアせらす」どの、出る譯は有ませぬ。

べ。いゝや、しばらく御待ちなされ。現に二晩つゞけて見て其で心も固まりました。その顛末を、然らば、も一度貴殿の御耳へ入れましやうか。

ほ。こりヤ承り申しましやう。

べ。「べアなアど」凄味の思入。

而も對向の天の果、今もきらめく那の星影、北から西へと移る途の程も太凡今頃か、「まアせらす」どのと拙者とが……否さ、一時を告亘る鐘の響も何と無く凄味を帶びて聞えた折……

言ふ内幽靈出て來る。

ま。しッ、まゝ、御待ちなされ。出ましたぞ、出ましたぞ。

「べアなアど」透視る擧動。

べ。やはり、今夜も昨夜のとほり御崩れなされた先君に其身其儘の形態。

ま。さ、如何、「ほらしお」どの。貴殿は學者。さ、さ、幽靈と、さ、さ、今から話を爲され。

「ほらしお」立上ッて幽靈を見る。

べ。もし似ては居ませぬか。

ほ。いや、も、其儘そッくりです。あゝ、あの怖いやうな、駭いた樣な顔の凄さ。

べ。定めて何か言ひたいのでしやう。

ま。早く御尋ねなされませ。

「ほらしお」佶となる。

ほ。おのれは何か。夜を籠めて、而も姿は先君が御出陣の時のまゝ。目狂はしい身樣の曲者。さア何となう返答せイ。

「ほらしお」始終大膽の擧動。幽靈は次第に退く。

ま。そゝ、幽靈が負けたわイ。

べ。あれ拔足でそろ〳〵と。

ほ。退散するか、卑怯な奴。やア返答は何と何と。

此内に幽靈全く引込む。

ま。もはや全く退散しました。何をも返答しますまい。

べ。心は恐怖さ滿潮でも引く汐合に海苔が來て、麁朶では無くて無駄威張、旨く退散しましたが……ふゝ、貴殿の御顔の蒼さ、御身體の戰慄方……それでも心の迷ですろ。さア如何でそ「ほらしお」どの。

「ほらしお」感心の體。

は。此目で篤と視ぬうちは信けふきぬほど不思議だわイ。

ま。そして先君の樣でしたろ。

ほ。いや、も、それは瓜二ッ。貴殿が貴殿に似て居るとほり。それに鎧は先君が諸威との戰爭に着されたのと同じ物。顔の顰蹙も先君が橇に騎ッたる敵軍を氷と共に粉微塵打碎られた其時に現されたのと同じ樣。さッても不思儀な

ま。

事と言ふハ
其様子で時刻も違はぞ
ば。
二夜までも吾儕の
ま。
前へさまよひ
き。
ば。
出た事です。
や。
合點ハ行きませぬもの丶、思ふに凡事でハ無いです。
國が亂れる前兆でしやう。
（未完）

「今私が讀で御聞せ申した筋書について貴君の御許ハ如何です」。「至極面白いですが一寸一ッ……けれど直よなやりましやう」。「何處です」。「これを狂言でやるよハ二時間ばかし掛りハしませんか」。「いかにも、丁度其位ハかゝりましやう」「それでハ私ハ少し長過るかと思ひますから一時間遲く初めて一時間早く終ふやうよなさッたら至極よいでしやう。」

批評

新編浮雲

春酒家主人、二葉亭四迷兩氏合著、第一編第二編既發、金港堂出版、

既發の處は僅に二篇ですが、例評も今は加へられるだけの長さですから、愛で極略して申します、

全体を一口で評せば近頃まだ比類の無いほどによく情致を盡くした作で、そして又比類の無いほどに脚色の無い作です。文章を又一口で評せば外に真似の少ない程珍らしい俗文体で、そして又外に真似の少ないほど落付いて居ぬ句法です

脚色。　中に現れて來る人物が文三、阿勢、昇、阿政、ぐらゐの處で、流行の固有名詞の巣を作られなかつたのは至極面白く、そして高尚な物を主人公に爲るといふ古代の迷想に眩まされなかつたのは又一入の御卓見です。　併しながら情致を穿つ事に力が入過ぎるを自然理想に傾いた人物が多く現れて來るもので、今記者は此小說を讀下した處に於て幾分かその考を出さないでも有ません。　如何にも本田昇は輕薄の才子です、無論君子の資格を以て評される者では有ません。　が、如何に自分が一等進み、如何に自分が婦人の女々しい愛を得、如何に自分が内海より立優つて居るを考へたにもせよ、内海の面と面とぶつかつて意地あしく嘲弄するさは……いえ、實に、それハ本田も内海とは隔てなく交際して居たにもせよ……あれ程に嘲弄するとは迚も有るべき事では無いです。　やれ「明治の丹治」だの、やれ「痩我慢なら大抵にしろ」だの、たとなげ無い、口ぎたない點に於ては其罵詈はほとんど類が有りますまい。　是が眞の戲話であるなら何の事も有りません、が、それは戲話で無いとは疑も無い事實です。　戲話で無くて是程なのは恐らく世には有りますまい。　或は有るかも知れません。　けれど極めて稀な物です。　本田のやうな人物が實に世に有るものだと言ふのはつまり世に稀な人物を拾上げて用ゐたといふ事です。

阿政と阿勢とが輕躁で浮薄なのや、内海が優柔で女々しいのや孰れも世には稀なものです。　是ほどに甚しい輕薄な婦人や是ほどにはげしい姑息な男子はまづ異類と言つても好い程です。　それに本田も異類です。　全篇の眼目が皆異類です。　異類の者の情を穿ち、異類の者の趣を畫くのは六箇敷はありません。　阿政が金錢で眼を眩まし、文三が色々に考へるなど至極面白く出來て居ます。　が、それを寫出すのは、普通の人間を持出して而も其間にある微妙の特異を讀者の眼に見せるより更に難くは有りません、いゝえ、尤も容易です。　容易な寫方ならば貴ぶほどでも有りますまい。　從來の小說を讀んで見れば人物と人物との間の特異が十分に現れては居ません。　その反動で今日の小說には特に奇癖の人物が打

揃って骨子を爲って居ます。　が、いづれも悪いです。　けれど此反動の此時に生ずるのは一般の數ですから敢て咎めるにも及びませんが、しかし、その反動に任せて置くのもまた褒められぬ事でしやう。　「さアばんてす」の「どんきほオて」、その主人公は奇辯の人です。　けれど實際あの時代にはあの儘の人物が有ッたので、そして時世に投合したゆゑ非常に流行したのです。　が、之さへも冷淡に、否、公平に評すれば小説としての價値よりは流行としての價値の方が豊に優っては居ましやう。　「どんきほオて」ですら既に左樣です、實際を寫しただばかりですから。況んやこの浮雲、實際よりは離れて居て、そして時世に幾分の投合を得て居る處は僅に阿勢のみですものを。　太く褒めるにも足らないとハ智者を待たぬ處です。

阿政の性質のあらはし方が十分では有りません。　初編二編に現れた仝人の性質を察するに、金錢の有無に因って愛憎を殊にして、而して第二の性として自分と仝樣に輕噪な人物を好む處が有るやうで、而も之が阿政の性質の特與の主な點となッて居ると見えます。　それで初編第二十二丁に「疵瑕と言ッては唯大酒飲みて、浮氣で加之も針を持つ事がキツイ嫌ひといふばかり」とばかりあります、肝心の金錢で愛憎を殊にするといふ眼目は全く載ッては居ませんでしやう。　疎漏では有りませんか。　果して初篇に書いてあるとほり、阿政はたゞ大酒飲で、浮氣で針が嫌ひだといふのが眞實ならば、　免職の後數日の内に文三への待遇を殊にする件が何の故だか分解りません。　要するにこの冷遇は文三が金錢を得る途を離れた處から起ッたより外には、前後を見ても、見えません。　それゆゑに、實に、それならば前の阿政の性質のあらはし方が疎漏では有りませんか。

次に初編六十三丁に阿政が阿勢を文三に娶せても宜いと心で思ふ体の文章がありましやう。　この文章で考へれば阿政が阿勢を文三に娶せても宜いと思出した原因は主に阿勢が文三に親しむのを見て終にその氣になつゝのと見えます。　それなら阿政が其志を飜すのは阿勢が飜してから後の事で無くてはならぬでしやう。　是は疑も無い道理です　處が、事實は左樣でなく、阿勢がまだ文三と親密を薄くしたとも見えぬ内に阿政は文三を疎出しました。　わからないでも有ませんか。　よし、それは前のとほり金錢の沙汰に因るものと辯護して見ても、それなら阿政の考が再度變はッたその趣を書いて有るべき筈ですのに、注意が其處まで行かなかッたのハ無論疎漏の随一と見るより外は有りますまい。

阿勢の性質の變化が記者にて些しも分解りません。　文三が免職を受けて後、本田が觀菊に阿政母子を誘ひに來た時にも、　阿勢ハまだ文三を疎んで居るとも見えません、また本田をも愛して居るとも見えません。　「だけれども本田さんは學問は出來ないやうだわ」。　「ふゝ學問々々さお言ひだけれども立身出世すればこそ學問だ。　居所立所をまごつくやうぢやア些とばかし書物が讀めたッてねッから難有味がない」。　「それは不運だから仕樣がないわ」。　是で此時の阿勢の考ハ十分わかッて居るでしやう。　そして團子坂の觀菊ハその明後日です。　そこで明後日になつて見ると、阿勢の樣子はがらりと變はッて今は文三を疎んじて、本田を宗んで居る体が見えます。　なるほど阿勢の持色は變はり易いので持ッて居ます。　が、わづか一日で、而もその間の日には本田が來て阿勢に甘言でも言ッてといふ事も無くて、　それであのとほり豹變するとは一般の心理上、とても有るべき事では無いです、いえほさんど有りません。　假に有つたとした處が、そんな異數の解釋を與へて無くてはならぬ譯です。　それが與へてありません。　わからないでハ有りませんか。　疎漏でハ有りませんか。

と言ふと辯護の人はかう言ひましやう—「阿勢は其實俗にいふオテツクで、はじめ文三と親しんで居たのは、其頃まだ本田といふ候補者も無く、男めづらしい折からゆゑあの位親しんで居たので、決して心から文三を愛して居たので無い。　文三が熱心に愛情の事を言はうとすれば、やれ高だの月だのと外の事へ紛らせる、是が口先で文三を弄んで居るばかりで、決して內心から愛して居た者で無い證據で後に本田が出て來てからそれと交際を深くするに隨ひ、輕薄の本氣は遂に投合して今度はその熱情で終に心も變ハつたので、何も怪しむべき事は無い」。　是は自

家の利益をのみ專げて、さうです、自家の眞珠を拾上げて他の珊瑚を捨てた論です。　なるほど阿勢はそのとほり人を弄んで居る質の者かも知れません。　それならば假令文三が免職を受けて後も猶それを稱揚して甘心を作らせて心で笑ッて居る譯です。　たとひ稱揚したにもせよ、その害が自家の身に有りませんものならば、面白半分さう爲るのが此樣な人物の一般です。　處が、叙事はさうで無く、親切に文三が行かぬと言ッても強ひてそれを氣に注めません、いや、氣に注めた体を爲ません。　それなら性質ハ前後矛盾して居ます。　或ハ此時阿勢の心は（假に定めて）既に本田に向つて居たのでそれで全く左樣なのでしやうか。　いゝえその辯護ハ聞いです。　上野公園で本田と行ふ會話の体、それもやッぱり從前に文三に行ッたのと仝樣です。　然らば從前に阿勢が文三に對したのがほんの表向ばかりといふならば今度本田に對するのも仝理で表向でしやう。　なぜです。　斷案を起すべき前提が互に仝じです。

是で辯護ハ破れました。　阿勢のやうな性質ハ迚も受取り得られません。　受取り得らるゝなら、極めてあはれな小題です。

次に文三の心裡の左右を寫し得て至極面白いです。　この一段に於ては今日自餘の作者にまだ例の無い處です。　併しながら猶惜しい處ハ數有ります。　文三があゝかう色々に思直すのでほとんど第二編の過半は塡ッて居ます。　が、その種類は何々かと問へば、第一、阿勢も本田に氣が有るか、第二、氣が無いか、第三、叔母ハ薄情か、第四、薄情で無いか、この四つより外ハ有りません。　勿論外に本田を怨むこと、母を慕ふことも有りますが、それハ只左樣一途に思詰めたばかりの物ですから色々に變化する考と仝一には爲りません。　そこで此四つの考が二編の過半を含んで居ます。　是を詳細と言つて宜いでしやうか、　そもそも冗長といッて言ひでしやうか。　實際この時の文三の胸に浮かぶべき考ハ實にこの四ッばかりでハありません。　それらを作者ハ氣が注かれて故意と省畧されたか知らん、一向に見えないで、さゝ仝じやうな事がらが幾度も繰返して出て居ます。　ちと冗長の方らしいです。　無論、この邊の心情をばこの位に寫さなくてハ小説の甲斐ハ有りません。　記者ハ之を寫されたのを惡いとハ申しません。　ただ寫し方が下手なのを、徒に繁雜にくだくだしく、そして色々の考を包括して無かッたのを惜しいことだと申すのです。

肝要な處ハこの位な物です。　扨是からハ文章の評を概畧ながらいたしましやう。

（未完）

雜纂

「のるまんでいと」いふ國では小娘が猫の尾や爪を踏付けると、嫁入時が後れる前兆と信じ。　もし尾も爪も仝時に踏付けると必究惋ふ出遇ひ、そして猶其後少くも四年經たなければ夫を持つ事が出來ぬものと考へて居ます。　是は無論、田舍に行はれる事で、宗教から出た迷信です。

英國で「むるんす」と言へば誰でも知つて居る小歌の作者ですが、不思議なことは此人が音樂に關しては何も出來ませんでした。　はじめ音樂を學ばうと思はなかッたでは無いでしたが、どうも聲は惡し、耳は鈍し、とても成功する見留が無いと斷然覺悟して仕舞つたさうです。　けれど作曲に至つてはあのとほり錦心繡腸でした。　仝じく「さイぶる」、「ひイばア」などゝいふ詩人たちも音樂の事はすこしも出來ませんでした。　それで歌を作る點に至

ッては隨分自由自在でした。　やれ「わたしは聲が悪いから」の、やれ「あたしは肺が弱いから」などゝいふ淑女がた、ちと御考へなさいませ。　「ひイまんす」夫人といふ詩家もありました。　赤染や紫は引くまでゞも有りません。

蒔繪の名。　蒔繪は我國美術の中最も優美なる者なり。　此名詞はもと漆器に金銀箔をまき散らして之を粧ひたるに初まりて其後やゝ人智の進むと共に意匠も大に進み、初めはまき散らすと云ふ意味なりしも此頃より畫くと云ふ意味を含むやうになりたり。　東鑑に鵄蒔云々、義經記に敷目にまきたる赤糸威の鎧、曾我物語に梨地にまきたる白覆輪の鞍などあるは皆な畫の意味なり。

學藝

蟲の話。　其三。

龍は其初池中に潜み、一旦雲を得れば飛行自在の通力を生ずとか申しますが、近頃の動物書には龍のことを書いたものもありませんゆゑ其形状もよくは分りません。　併し古今の畫工が畫いた龍は水中に潜んで居る時も空中を飛ぶ時も其形状は同様にて水を泳ぐ機關もなく空中を飛ぶ機關もありません。　始めて龍を畫いた畫工が若蚊の變化を知つて居ましたなら今少しと龍の畫き様もあつたらうと思はれます。　蚊の出世する様子は譚に聞く龍の履歴に酷く似て居ます。

孑孑の形状は下手の畫工が畫いた龍に似て、しかも名家の畫た水中の龍よりは水中に生活するに便利な形状です。　又蚊の蛹が尾を水底に觸て眠る状況は龍が深淵に潜んで雲雨の

至るを待つ様子に似て居ます。　龍が雲を得て天に昇るは蛹の胸部が裂けて蚊が飛出す時に似て居ます。　蚊も翅が生れは復水中の物ではありません、英雄や豪傑の血を吸て腹を肥す大膽不敵の尤物です。

前號に御約束を致しました蚊の生涯の大厄の鬪は孑孑蛹の鬪と共に上に載せましたから別に説明は致しません。　追々蚊の發生する季節に向ひますゆゑ皆さん實地に御研究なさりませ。　蚊の發生を研究なさるには器械も要しません但し孑孑、蛹は皆至て小さなものゆへ蟲眼鏡か顯微鏡があれば唯だ肉眼で見るよりは一層明瞭に分ります。

寄書

左の一篇は不作法失敬なる言葉多けれども議論眞率にしてよく矩矱に入り、文章諧謔を以て之を行り而も一種斬新出色の所あり殊に本論の主旨なる優美の論は大に淑女の方々を益すべければ茲に掲げぬ。　記者識す。

久平老人述ぶ。

束髪に付て。

今より十餘年の昔なりき、太政官より布告を發して散髪の利益を示し給ひ、且風俗に關係ある事なれば可及的散髪になれよと諭し給ひき。　久平は其の頃或る縣に住居せしが、その縣令は有名なる活潑家なりければ、苟も本縣下に住する者は何等の理屈あるを問はず必ず散髪すべき由の命令を下し給ひ、猶愚頭愚頭する者には、令殿常に鋏を懐にし給ひて、チヨキチヨキ遣らかし給ひき。　されば鋏み切られたる者は鬢付けずくめの怒髪皆逆立ちて怨み怒れど甲斐ぞなき。　久平なども其の頃まだ大和魂の猛かりしかば随分と令殿の陰言を申してき。

扨て今の婦人世界を見れば、かくの如く厚き御世話の無きにも拘はらず、西洋流の結髪を輸入する日一日より繁昌す。　まだ霜将に降らんとするの頭に思ひも掛けぬ薔薇の花開き、何熟せざる芥子坊主にも丸薬の如き束髪を載する事あり。　僅に十年の昔に思ひ比ぶれば、實に男子愧かしき御猶發なり。　誰か日本婦人の進歩遲しと云ふや。

去かし淑女の方々が束髪と舊弊髪との利害を明にしてかゝる明斷を行ひ給ふと稱賛せんは餘り早呑込に過ぐるが如し。　淑女方が流行に後れじとせらるゝは、一つには世の中の好みに叶へて交際を善くせんが爲あるべく、一つは良人をして粋な拵へを見せしめんが爲なるべし。　これ等の爲に淑女方は往往その身を犠牲とせらる、こを男子の深く謝すべき所なり。

かく言へばとて、婦人の時様を追ふは無茶苦茶なりなど陰言を申す譯にあらず。　抑流行の來るや疾雷驚電も宜しく、堂堂たる男子すら鬚を拈りて一考するの餘裕なく、バッタリ敗亡、當世風の紳士たらざらん事をこれ恐る。　まして況や、イヤナニ、御婦人とても亦御同様なるべし。　世界万

國皆然り。　先年日本より歯磨粉を米國へ輸出せしに、大ゐ貴婦人の評判宜しく、需用日々に増加せし折柄歯醫者先生さちがこきを分析したるに、何ぞ計らん例の房州砂であらんとは。　是に於て先生たち大に驚き、かくの如き粉を使はゞ數年にして米國人の歯は悉く消滅すべし（それでは余輩の職業が無くなると云たら堂だら）とて頻に世間に訴へしかば日本歯磨粉を使ふ者パッタリ無くありしと、或る商會の人は語れり。　されば流行は流行としても、その利害を考へて世の中に訴ふる人必ず缺くべからず。（抔と云つて久平先生、餘計な世話を燒く前置きでは無いか。）

右の譯なれば久平も亦大に考ふる所あらんと大望を起したるが、待て暫し、世には文明開化の貴婦人、紳士、學者、役者多くおはします、安んぞ久平等が考へを待ち給はん。　その御筋の御考へを拜聽して以て安心するにしかじ。　个樣に取極めて、御苦勞にも、諸先生方へ馳廻りて束髮の利害を質問したるに、イヤハヤ久平大しくじりなりき。　全體束髮と云ふ者は利有て害なき者なるに、利害如何など申す條奇怪なりと以ての外の御憤り。　夫故久平は速に害の字を取消して、束髮の利如何（で御座り奉る歟）と伺ひ奉りたるに、大抵は左の如き御條目なりき。

第一條　束髮は時を省く。

第二條　束髮は費を省く。

右は經濟上の便益なり。

第三條　束髮は油をコテと付けざる故塵埃の附著する事なし。

第四條　束髮は右同斷故に毛穴を塞ぐ事なし。

第五條　束髮は簡單なる故に毛を引き釣る事なし。

右は衞生上の便益なり。

かくの如き次第なれば束髮は文明の髮にして日本髮は野蠻の髮なり。　束髮を結ふ人は皆金持ちで、無病で、長命で、死後は極樂に生るべし。　日本髮を結ふ人は皆貧乏で、多病で、短命で、死後は無間地獄に墮つべし。　これ論理學の證する所なりと、云々。

然れども久平は中々のしれものにて且又陰言を云ふを好めり。　退て冷笑て曰く、束髮は文明の髮なる事勿論なり、しかりとて日本髮の野蠻なるを證するに足らず。　ビステキの滋養あるは勿論なり、しかりとて鯛の刺身は毒物なりと極むべからず。　必ず西洋髮と日本髮の利害を比較して而して利害相償却して利の最多く殘る者を撰ばざるべからず抔と新聞屋めかして堂堂と（竊かに）辯じたるは吾れながら隨分感心せしが、扨その調査は（餘り堂堂とも參らぬテ）、

第一、時間の事。　この調査は隨分六つかし。　御手髮か、髮結さんか、御腰元と、髮の種類は何何、結ひ手の巧拙等色色の關係はあれど、これ等を悉皆押しならして考一考せんに、成程西洋髮は手早に參りさうに思はる。　この儀に於ては西洋髮の勝利たること疑ひなし。

第二、費用の事。　この調査は更にむつかし。　銀杏返しが四錢で、島田、丸髷が五錢、束髮は僅三錢、イヤ文久一つだ、ナニ髮結の方で錢を出す抔と切支丹に入門でもする樣な噂は久平等が宿の婆婆ア抔の間にこそあれ、貴婦人達、大先生方に

おかせられては万万有らせらるまじき御事か。　扨又、東髪ならば瑣微の簪一本で胡麻かせるが、日本髪では色色の道具が入る……イヤ東髪の飾りに寶石を用ふるでは無いか。……それでも瑇瑁だの珊瑚の五分珠だのと……珊瑚の五分珠より金剛石の二分が高い……ナンノそれよりか珊瑚の三尺五寸珠が高い……抔云ふ論に至ては丸で哲學の穿鑿の様で是は御預りと致したし。

第三、ゴミの附く事。　油と付くれどゴミが付く、代りにゴミは顯れず、又ゴミを梳き取るには油を第一の方便とす。尤ゴミの顯れざると利として不潔を掩ふ所存は無けれど、日本の様にシャッポを被らぬ國に於て、この油無かりせば、シャッポの代りに砂煙を被り、剰さへ後れ毛は八方に散乱し、鬼神をも欺く様子よて人を訪ふなるべし。　これ豈面白き事ならんや。　御辭儀を爲ても砂埃はこぼれつべし。　眉を掀げてチョイト簪で頭を掻く抔は御無用御無用シャッポを被らぬ國に於ては、油を付けて日光を反射せしむる事甚衛生に益なる由は或る西洋人の説にしく、いつぞや時事新報よ掲げありしを貴社に取次ぎせられたる事もありき。　又日本人の如く粗き髪を持てる者は油氣を付けざれは髪の磨れ切る事甚しと云ふ。　兎よ角ゴミの付き易きは則ゴミを見せぬ方便となり、更にゴミを梳き取る方便となる、これを清潔に應用せんも、不潔に應用せんも、そは用ふる人よ因るべし。　飴の用は必しも盗賊の資けに止まらじ。

第四、毛穴を塞ぐ事。　この事たるや久平にはチト分りにくし。　一體ろの様に澤山油を付け給ふは、いづれの御國風よや。　上方風でたますか、但しは西國風でアリヨルカ詳ならねど、まづ東京風では水油か、但しは梳き油を聊付けて、その油はスッカリ梳き取るを貴び申す也。　油は重に梳き取るの爲なり、塗り付くる者と思ふは不意……不意の至り也。

第五、毛を引き釣る事。　日本髪は周圍の毛を鬢たぼ前髪等に用ふる故、髪及び髪飾りを支ふる者只中央の一部分なる毛に在り。　西洋髪ハ引詰髪なれバ一様に重さを支へたり。これ迚も矢張前の方の毛を煩ハす事多けれど、まづハ大に公平の方なれバ、老年に至りて藥鑵となるの患無かるべし。この點に於てハ日本髪閉口なるべし。

箇様に調査したる處、手早い事と引き釣り塩梅とハ西洋髪の勝利なるが、その他の條目に至りてハ人々の心得次第よて善くも悪しくも取らるゝなり。　されバこそ是れ等の點に於て、跳ね者ハ常に西洋髪に左袒し、因剛者ハいつも日本髪の肩を持ち、水掛け議論紛々として干る時なき者ハ職として議論の見當違ひに出るなり。　西洋家が日本髪を攻撃するや、多くハ影を撃つに止まるのみ。

以上の論ハ小兒の議論同様にて、實ハ論ずる張合も無かりしが、是れより久平眞面目よて世の大先生達に伺ハんと欲する一條あり。　是れから車輪玉で……と申すハ外のことに非ず。　前條の如き種々の利益ハ悉皆西洋髪の勝利と致しても、まだ大切の一ヶ條を漏し給ふに非ずや。　西洋髪ハ優美なりと云ふ事を説き給ハざること是れなり、否、日本髪よりも優美なりと宣ハざるハ何ぞや。　稀にハ左様に宣ふ方もあらんが、それ令孃を愛し給ふ御心の闇なるぞバ御自らよ惚れ給ふ御心

の迷ひなるべし、廣く世の中を御覽せらるゝ公平の御目にはよも有らじ。陰陽師は身の禍福を知らず、醫師は己が病に困る、美醜の鑒定は他人の眼最も明かなりとす。扨耳を轉じて世の公論を聽く時は百人の中九十九人半までも束髪を見て優美なりとも、意氣ありとも云ふ者なし。稀には何意氣とやらん云ふ者もあれど、その形容詞は委しく聞き取らざりき。それも尤なる事ぞかし。束髪は盛裝の時間の多くは、シヤッポの下に在るべき者にして、早く云へば役者の鬘下と同じ物なり。是れもチト極端の譬へかは知らねど、迷ひを醒すは極端より善きは無し。之に反して日本髪は古來盛裝の重なる一部分を占めたれば、美の養育の届きたること無論なるべし。これ進化論とやらでも明白なる理窟なり。

されバこそ此頃は「デモ束髪」抔云ふ者出來れり。それ如何なる束髪ぞと云ふに或る種類の婦人が堂せ御作りしても駄目だから束髪にでも成らう抔と云ふ哀れに悲しき束髪なりとぞ。かくの如く束髪と剃髪とを取違ふる抔は万万有るまじき事なれど、人の口には戸が立てられず、兎に角李下に束髪を正さぬこそ善けれ。此の後右樣の雜言を申し觸らす者を見當らバ、久平老いたりと雖、そやつが口の先をつねり上げて淑女方に忠義を立てんと存ずるなり。

淑女方或は宣ふならん「久平ウイやつ。志かし云ふ奴には云はせて置け。今日は如何なる日ぞや。女子の智徳を進むべき日に非ずや、地位を高むべき日に非ずや、權利を擴張すべき日に非ずや。今日はこれ髪を撫でてオシヤラクをする時に非ざるなりと」。と宣はバ久平甚不贊成なり。世の有用物に於て唯實用とか、經濟とか、或は健康とか云ふ目的のみにて、美と云ふ元素を含まざる者は一も在ること無し。用を撲滅さざる限りは(少し位用を害しても)可成丈美を加へんと欲するは人工の常に期する所なり。若し實用、健康、經濟の目的を達して已むべき者ならバ、切り髪か慈姑髷に勝る者無かるべし。既に束髪を選び給ふからは、美の爲に幾多の時間、經濟、健康を犧牲とし給ふこと言はずして明なり。況んや上流の方々の美に熱心なる、馴れぬコオセツトの苦みにも善く堪へさせ給ふをや。而して日本髪が上流の試驗に落第せしは抑何ぞや、蓋西洋舶來の物に非ざるが故ならん。

此の處にて起るべき問題二つあるべし。曰く便益を犧牲として優美を持ち込むに何程を定限とする歟、束髪にては甚不十分なり、日本髪にて丁度十分なりと云ふも餘り勝手なる經界にあらずや、これ一の問題なり。曰く「進化論にて考へて日本髪は美の養育届きたらん」。と思ふのみにては美の證無し、何れの點が西洋髪に勝りて美しきか實地に指し示せこれ二の問題なり。余輩第二の問ひに答ふる時は第一の問ひに答ふるを要せず、何となれバ和洋兩髪の差違を明にする時は、何れか己が頭に適合し、何れか己が頭に不適當なるか、撰ぶことの自由はその人の心に在ればなり。余輩は忠告するのみ、注意するのみ、指圖は致し申さゞるなり。

日本髪の美は如何なる點に在るか、是れより申述べん。委しく云はゞ、第一、髷の恰好、第二、髮全體の恰好に付て言はざるべからず。

然れども髷而已の恰好に付ては、此度はズット略して述ぶる積りなり。　銀杏髷、唐人髷等は唯兩翼より成り、三つ輪に至りて中央に一の象を成し、年齢の進むに隨ひ中央愈大く兩翼愈小く遂に丸髷に達する等整然として理屈ありげなる事まだ多けれど、本論に關係も薄ければ、それは他日の問題と致すべし。　さて一般に云へば日本髷は人人の容儀に應じて伸べ、縮め、扁め、高め、自由に適合せしむるを得べし。　装飾の重なる部分なれば此の如くならざるを得ず。　西洋髪は唯一塊の團子のみ、位地を上下するの外、加減斟酌の餘地甚少し。　所謂鬘下なれば是れにても結構ならん。　これ和洋の髷の差ひなり。

次には髪全體の恰好にして、西洋流と異なる所は鬢、たぼ、前髪を脹らす事なり。　これは本論に於て最大切なる關係あり久平が車輪玉寶にこゝに在り。　總べて頭小くして臺の大なる形は人をして安全の思ひあらしむ。　然れども頭部を無茶苦茶に減削せず相應の嵩を與へながら而も能く安全に之を支へたるは人をして巧妙の感あらしむ。　故に安全の形愈勝つ時は活動の氣愈乏し。　又基底より頭に近づくに隨ひ漸々に窄まる處の斜線より成れる形は大抵悲慘の趣きあり。　寺院の尖塔、北極土人の小屋など圖に見るさへその感覺は如何ある。　埃及のピラミッドを地理書に見る時は唯三角飴の様に思へども、實際に就きてこれを見ばそも如何あらん、思ひ遣るたにうら淋し。　これ等の美術を人間の上にあてゝ見給ふべし。

（未完）

月報

●高等女學校　一ツ橋外なる同校ハ入學を志願する者多けれども目下滿員にて入校を許されず、來る七月にハ新に生徒を募集せらるゝ由。

●女子職業學校　神田橋外なる同校ハ從來夫婦共稼の婦人に適せる職業を教ゆる處なるが來る廿二年フランス國パリ府に開く萬國博覧會へ生徒の製品を出品せんとて目下陶器畫、縫箔、編物、作り花等を製造中なるが殊に陶器畫、作花は餘程見事に出來たる由。徒に空理を生徒に授けずして婦人に必要なる万般の職業を授くるは記者の最も欲する所なれば職員諸君の鋭意教授の良法を研究せられ同校の益々盛大ならんことを希望す。　同校の規則を知らんと欲する淑女あらば記者は御誘導の勞を厭はざるべし。

●婦人勤業會社　今度神田五軒町に婦人のみ役員となりて婦人勤業會社といふを設立し、婦人の風俗を矯正し、文學技藝を勸め、押畫、ハンケチ縫箔、及其他の手細工并に和洋裁縫、編物等何も婦人に適當なる職業を授けん爲め内外の教師を聘し生徒を募集し、又各區に出張所を設き以上の出稽古をもなし、又漸次婦人勤業場を設けて製品を賣捌く筈にて、資本金六万圓を募り、一株を金十圓となし盛大なる會社を設立する由、蓋本邦婦人合本會社の嚆矢なるべし。

●婦人英語會　高等女學校の教員其他有志諸君が新設し、去月九日其初會を同校内に開きたる婦人英語會は爾後續々入會するものある由。

●美術學校　屢々本誌に記載したる同校は課程も大略定まりて、其學科を繪畫、彫刻、石工等に分ち、差向き生徒廿名を募集し、追てハ二百名に増すことに内決せし由にて、上野なる音樂學校の隣地に校舍を設立せられ建築工事は丸柱或ハ彫刻物を用ふる由。

●美術品取調　去五日美術品取調の爲京都、大阪、奈良、和歌山、兵庫の二府三縣へ出張せられし九鬼圖書頭の一行は凡約九十日の豫算にて右の府縣に滯存せらる

畫、彫刻、陶器、漆器、織物、銅器等凡そ本邦の美術品を普く取調へられ爾後美術品の保存に就てハ大に計劃せらるゝ由。　右の府縣に藏せる美術品の數は大略本邦内に存せる美術品の八分方に相當せる程なれば日本の美術品は此府縣に集まれりといふも不可なきが如し、依て乞ふて隨行したる歴史家工藝者もいと多かりし。

●日本音樂會　去月廿七日鹿鳴舘にて開かれたる同會ハ非常の盛會にて樓上の二間も狹きを覺えたりと。

●大日本繪畫協會　今度畫家諸氏の發起にて大日本繪畫協會と云へるを設立し盛よ繪畫上の進歩を圖る由にて京橋區紺屋町に假事務所を設けられたりと。

●東京女學　芝濱房町なる同校は過般校舍擴張以來生徒も追々増加したるが尚ほ今度生徒の定員を増して臨時入學を許す由詳細は廣告欄を見られよ。

●江東義塾　にては今度女子部を増設し盛に淑女を薫陶せらるゝ由。

●唱歌大會　去月廿二日府下十五區六郡の各公立小學校の女生徒三千餘人日比谷練兵場に會して唱歌の大會を開きたりき。

●東京舞蹈會　ハ役員諸氏の盡力一方ならず會員中にハ舞蹈の熱心家多きにも拘はらず近來來會する婦人大に減したる由。　近頃けしかる風説の立ちたるよりなりと云ふ人あれど如何にや。

●舞蹈の謝絶　小石川の或る有名なる女學校にては其生徒を舞蹈會に出さんとを勸告せられたるに斷然謝絶せられたる由、其理由は知るによしなけれど何にしろ英斷とこそ云ふべけれ。

●養育院慈善會　は去月廿日より上野公園に開會せられたり、其目的ハ慈善、其賣捌の方々は顯門の夫人令孃にて而も深窓に閉籠れる古風の淑女の如くならずして交際上手の方々なればよほどよく賣捌けたる由。

●俳優慈善會　は去月十四日より三日間鴎遊舘に開會せしが記者の目算とは大に異なりて來客少くして利潤はなかりし由。

●産婆　先月四日府下新舊産婆六百餘名を府廳議事堂に招集して武衞生局長より産婦に對する取扱に就て懇に其方針を諭示あり、又從來の弊害を述べられたるより産婆仲間は大小の組合を設けんとて屢々集會を催せしがとかく欠席多く又は異論者もありて協議整はざる由。　舊營業者は實地經驗を以て他を輕蔑し新營業者は無學なりとて他を冷笑する傾あるより折合はざるなりと。果て然らば歎すべしく。

●東京育女會　を去月二十五日木挽町厚生館に開かれ、來會の淑女紳士は會員と傍聽人とを合せて二百餘名なりき。　同會の演説者ハ七八名にて醫學士竹中成憲氏と堀口昇氏との演説ハ殊に有益なりし由。　竹中氏の演題ハ食物の話、堀口氏の演題ハ女尊の説なりしが何れも速記に有名なる市東謙吉氏が筆記せし趣なれば遠からず上梓せらるべし。

●日本の演劇　米國人リンゲ氏ハ昨年我國に漫遊中屢々新富座、千歳座等の芝居を見物し痛く感服されしより今度アメリカにて同氏が主幹となりて輸入新聞を發刊するに付き其新聞に日本演劇の筋書をも掲載せんとて二三の筋書を築地なる友人に依賴し越されたる由如何なる者を撰み出すにや。

●演藝改良會　一時音沙汰なかりし演藝改良も愈々澁澤榮一、太田實、福島宜三外數名の紳士の盡力にて一會社を組織し、日本橋區蠣殼町なる舊三河侯の屋敷に一大演藝場を新設する由。

●黄八丈　近來米國サンフランシスコ地方にて我國の黄八丈縞を以て婦人服を製することの流行する傾向ある由。

●支那の女服　嘗て東洋諸國を漫遊したる米國有名の某氏ハ歸國後米國新聞に東洋の事情を掲載せしが其記事中に支那女服ハ費用も少く衞生上にもよき故米國婦人ハ之を着用すべしと勸告したる由。

●立派なる腕輪　朝鮮傳訓使趙氏が朝鮮國王、后妃、及太子の妃の命により腕輪三個を東京の某金工に依賴したる由、此腕輪は金無垢の地に金剛石等の寶石を飾り附けたる極めて美麗の者にて寶石だけにて其價九千圓位なりと云ふ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●餘興

新作謎

（一）足せばなくなり、足さねば大きくなるものは何でしやう。

（二）常にかはの中に住み頭を下にしてゐるくものは何です。

（三）人の形はしたれども　母といふ者身はもたず
暑さ寒さをさへ知らず　命は更にもたねども
をさなき女子にめでらるゝ。

（四）此身は弓の中にすみ　此身は二子中もよし。
此身なければ世間はやみ　此身なければ美術なし。

右の四を殘らずおあての御方にはいらつめ十二十三號の二冊を進上します。

鐵道旅客の義務……は汽車が止まるまで座を動かぬ事です。

ある教員が修身學の講義をし了り、十分生徒もわかッたものと考へて、生徒に向ひ、「もし御隣の人に打たれたならその時御前達はどうするね」と問ふと、一人の少女がすこし考へて「その時には打ち返します」。

「あなた、昨日あの人の煎茶の會へ御出なさッたさうですが、全體あの會はちと風儀のわるい會ですから……」「へエ……しかし御菓子は旨うムいましたよ。」

●通信問答

今まで世間のいらつめの方々から通信にて御問會になッた事がムいまして、一々書状で答へて居ましたが、それでは一局に偏しますから此號からは殘らずこの餘白へ載せるやうにいたしました。が、紙幅も少うムいますから、混入ッた事をば申せません。混入ッた御問ならば或はその性質により本紙内に委曲に出すか又は沒書にいたします。今度は餘白がないから唯一つでも。

かをる孃へ　輕便香水製造法は左のとほりです。白薔薇の葉を摘み、丁寧に清水で洗ひ、之を口の廣い瓶の中へ入れ全量ほどの最上のアルコールを加へ、瓶の口を密封し、二ヶ月ほど過ぎて後、取出して御用ゐなさい。もし之を最上にするには密封したまゝ二年ほど過ぐさせるのです。尤も別の製造法は其内に「いらつめ」の家政欄内へ出します。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

はかやうに高い熱度でも生きてゐましやうが通例のバクテリア位ハ沸騰すれバ死にますから惡疫流行の時は煮ざましを用うるのが至極よろしうムいます。　殊に小兒にハさうです。又あしき瓦斯の水中に含まれたるものは煮沸せは發散ます。

第二藥を用うる法　濁りたる水にても明礬又ハ炭酸曹達を少し入れゝば忽ち澄みて清潔の水となります。　けれども多量が多いと呑めません。

第三蒸餾する法　此法を用うれば大抵の混合物をも溶解物をも引離し良水を得るヿが出來ます。　蒸餾とハ「ランビキ」にかける事です。

第四漉過する法　砂を以て漉すもあり、炭を以て漉すもありますが、炭を用うる方が十分に漉すヿが出來ます。　近年精密な水漉が出來て大抵な混合物ハ漉せますがバクテリアを漉し取るヿが出來ませんから飲用には漉した上にも煮沸さなければなりません。　又水漉は水中に混りたる有形の汚物だけはとれますが溶けて居るものは漉し取るヿは出來ません河水ハ混り物が非常に多うムいますから河水を飲料にするには是非漉さねバなりません。　漉した水の効能は大した者で先づ第一暑中に炊いた米飯が早く腐さらぬが妙です。　最も簡單な水漉器械ハ四斗樽の中へ細き炭二斗を入れ、其上に水でよく洗ひたるシロの皮を敷き、其上に玉川砂（極細い砂）一斗二三升を入れゝバそれで良いのです。　そして一ヶ月中にハ少くも一度は必らず砂も炭も水で洗ひて日に乾さなくてはいけません。

一人一日に必要な水量　人の顔色ハ文明の度合に釣合ふものでムいます。　何故なれば文明國にてハ水を使ふヿが十分で自由ですから。　たとへば二階三階に住む人でも水が入用なればネジを廻せバ水が迸り出る仕掛になりてをりますから身體を洗ふヿが野蠻國の人よりハ自由でムいます。　それですから自然と皮膚が奇麗になる譯です。　水を使ふヿが自由になれば衛生法ハ催促督責せずとも獨り行屆きます。　何故なれバ身體も勿論のヿ衣服を洗ふにも水、器具を洗ふにも水、家屋道路を灑掃するにも水ですから。　或學者の調によりますれば一人が一日中に必要の水量ハ二斗二升です。　其上西洋でハ便所は行く毎に水で洗ふ仕掛になつてをりますからこれに入用な水も大層です。　殊にアメリカの大都會には此法行屆てをりますから之に要する水量をも加へますと一人が一日に使用するものは二石となります。　又歐羅巴では平均一石となりま

す。　水は是ほど澤山入用のもので水がなければ萬物を清潔にする事ができませんから衛生の一大眼目は良き水道を開く事です。

水の種類　人の使用に適する水の種類は澤山ありまして　まづ雨水、河水、湖の水、井の水、天然の泉などです。　其中どの水が一番使用によいかは國々の様子で氣候や土地の性質次第で異ひますが一寸あらましの品定を致しましやうなら次の通です。

雨水　雨水を使用てくらす處は澤山あります。　例へばロシヤの南、フランス、イタリヤ、ドイツの南は恰ど雨水ばかり用ひてゐるさうです。　また我國でも雨水でくらす所は澤山ありますが雨水は衛生から申すとあまりよろしくありません。勿論雨水は酸素と水素を含でゐますとは河水などゝ違ひはありませんが元來太陽の熱に蒸されて天に昇り再び下界に降ッたのですから蒸溜水と同じ事で滷類が少しもないのですから其味がよろしくありません。　そればかしでなく大變不潔です。　何せなればすぐ天から降る雨を溜めればまだ清潔ですが大概屋根から落るのを溜めます。　ところが屋根には色々の不潔物が溜てゐます。　だから之れを洗ひおとすも雨水は無論不潔です。　その上分量に定のないのが雨水の欠點です。三日に一度とか四日に一度とか雨の降る時が定てゐればよろしいですが十日も廿日も百日も旱魃のする事がありて水量に定限がありませんから雨水はよろしくありません。　が、是非用ひるならば雨が一時間か二時間降て空中の不潔物も屋根の不潔物も洗ひ流してから後溜めるがよろしい。　そして水溜桶は出來る丈清潔にし、そ して常によく蓋をしておかなくてはなりません。

井水　さらば井の水は如何かと申すと五尺か六尺堀て水の出る様な淺い井は衛生に至極よろしくありません。　御存の通地面には色々な不淨物が混てゐます。　そのうへお地の底と違て極疎鬆ですから不淨物即ち下水や卑陋な御話ですが糞汁などが井の中に浸み込みますから淺い井のよくないは勿論です。井が深ければかやうな不淨物の浸み込む事は勿論少いです。けれども木の井側でもいけません。　木で造りますと眼には見えませぬが穴が澤山ありまして其穴からドン〱差水がえます。隨て水は不潔になります。　ですから井側は煉瓦か石で疊みあげるに限ります。　其外日本の井のよくないのは釣瓶で水を酌みますからくむだけの穴が必要です。　そしてこの穴か

らは塵も虫も蛇も蛙も鳥の糞も必らずはいりますから水は是非不潔になります。　けれどもかやうな憂は西洋の様に煉瓦で積みあげ、ポンプで酌めばありません。　さてどの位深い井が一番よろしいかと申に十五間の深さがあればよろしい。十五間ありますと色々の面地を水が通りますから随分清潔になります。　そして便所や掃溜や溝に遠いのがよろしいです。

泉の水　雨水も井の水もよろしくなければなにが一番よいかと云ふに天然の泉の水がよいです。　山中の木などの繁茂りてゐる所から出て人里を通らずに引くとが出来ればこれほどよい水はないです。　が、泉の水は断えず増減もありますし旁々泉の水を引くとは東京などの様な大都會ではとても出来ない相談でありますれば他によき水と之れを引くよき法を求めなければなりません。

河水　河水でしのぐ處は澤山ありますが井水でさへ悪いのですから河水は勿論よくありません。　第一川水には如何なものが混りてゐるかもわかりません。そして傳染病の流行る時分に氣をつけて見ると川上に患者があれば川下に大概傳染します。が上の方には傳染しません。　けれども河水は必らずわるいではありません。人里も通らず、又水がドンドン断えず流れる河水となかなか上等です、けれどもなるべく用ひぬがよろしいです。

水の引方　水はいくら上等でも引き方がよろしくなければ水は不潔になります。　さらば如何すればよいかと申に大仕掛の御話は御預りに致しまして諸君の御承知になつてよい事は近所の井から御臺所などへ水を引く方法で厶います。　それには木の管、焼物、セメント、アスパルト、鐵管などを用ゐる色々な法がありますから一寸左に各々の善悪を御話し申ますやう。

木の管　木の管はよろしくありません。　第一腐敗り易い、そして度々修繕がきます。そして虫もくひ黴もはへますから木の管の悪いのは明亮です。　ところが日本の水道は大概木で造ります。

焼物の管　これも随分よろしう厶いますが困るとにも寒いと凍てはぜます。　又二階三階へ水をよびますにもとても陶器では破砕も易くもあるし、又管と管を手際よく附着るとが六かしいからいけません。

セメントの管　セメントの管は衛生上には至極よろしいですが薄いと直に砕れて役に立ませんから厚く作るとが是非必用です

から實際不便です。　だからこれも同じく落第で厶います。

アスパルトの管　アスパルトにて作りたる管も至極上等でもその下等なのは水が臭くなりますし、上等は高直で厶いますから廣く用ひるには矢張いけません。

鐵管　一番丈夫でそして管と管とを繼ぐに易いものは鐵管です。　若しチャンでもぬるか錆留をすれば鐵管ほどよきものはありますまい。

竹管　右の五の外に我國に最も適當する竹があります。　木は直に腐りますが竹は地中にあれば二三年は青々してゐますから少しの水を短い離りから引きますには竹が最も上等です。　その上價が廉です。

鉛管　近頃追々ひろく用ゐられますのは鉛管です。　鉛は御存の通素人にも隨意に細工が出來ますから當今西洋館で見受ける樣に家内で用うるには最も適當です。　が鉛管を用うるに一ツ大切な注意があります。　鉛が若し水中に溶けると大變身體に害になりますから鉛が水中に溶けぬ樣せんければなりません。が、それには屈竟なことがありまして水を始終管内に一杯にして置けば安全です。　若し一杯でなくして空氣が管中に入込むと鉛が水に交りて大害を人間に及ぼしますから必らず不斷一杯にしておかんければなりません。　さうすれば平氣です。

使用水飲用水　前御話した通使用水と飲用水と區別するのは至極よくないことですから水を引くにも區別せぬがよろしい。　第一二本引と一本引くとは費用が半分で出來るから經濟でもあり、衛生にもよろしい、即ち一擧兩得ですから二本の管を粗末に敷くよりは一本の管に念を入れて作るがよいです。

惡水を除く方法　惡水を除くとは衛生上に極必要なことにて水はけがわるいと地面が不潔になります、隨て諸病の源因となります。惡水の種類を擧げますれば流し水、洗濯水、風呂の水ですがこの水を集めると大層な者にて十分に計算しますと一日に人間一人にて平均二石の水を使ひますから東京で一日に二百万石以上の水を使ひます。　そしてまだ此外に雨水がありますから何にしろ莫大な水です。　して此水を何處にはかすかと云ふに大概は流れずに家の周圍に溜てゐて地面が段々吸ひ込みます。　野蠻國ならともかく今日の日本でヶ樣な事をして置のは實に恥しいことで惡水の排除法を改良せなくては病は減りません。　金が澤山ありますなら水をはかす一番よい法は地中に人が立て歩める程な大な煉瓦の管をふせこの管の中へ家

廣告

東京女學生徒募集廣告

本學敎科目ハ英語學、和漢學、數學、音樂、唱歌、和洋裁縫、編物、衛生家事、經濟、修身、博物、挿花、茶湯、和洋料理等ヲ敎授セシ處今般更ニ美術學、心理學、ノ二科目ヲ増加シ從來ノ敎頭ミス、カクラン、ミセス、イビー夫人本邦人十六名ノ外更ニ數名ヲ増聘シ寄宿舍ヲ増設セシニ付寄宿生三十名通學生若干名臨時募集ス有志ノ淑女ハ至急御申込アレ但初學生ト雖𪜈日々洋人懇篤之レヲ敎授ス

芝櫻田乘房町
私立 東京女學

轉居

京橋區ヤザエモン町九
醫學士 竹中成憲

春の屋主人、二葉亭大人合著
新編 浮雲
第二篇 定價金五拾錢

浮雲の一篇一たび出て從來の浮世小說顏色なしと迄に江湖の諸君子の喝采を得たる其浮雲の二篇には春の屋主人も力を併せ腕を振ひ新奇の工風と凝されたるに春の屋主人が又一層の錦上に花を添られたれば面白さたぐひなし此篇に於ては微妙の人情益々神に入り主公の性情は云ふも更なり他の人物の性質の如きも恰も紙上に活動せんとす其文章の如きは依然俗文体を用ひられされ共第一篇に立優りて婉曲にして且優美なり其脚色の如きはお樂の爲に畧して云はず請ふ一本を求て小說の眞味を味ひ賜へ

依田百川君題詩。竹本越路太夫丈及豐澤團平丈淸賞
末松謙澄君閲。中島蕭君著。給入自初段至十二段目

逆卷浪夢之夜嵐

上品金一圓
並品金五十錢
郵税金十二錢

このほんは。さるじうねん。かおきまさうどうのことをじやうるりぼんに。つくりたるものにて。きばゐをみるよりも。なほおもしろければ。よむひとは。よねんなくいんしよくまで。わするゝあるべし

金港堂 東京本町三丁目 原亮三郎本店
金港堂 大坂北久寶寺町 原亮三郎支店

鐵筆將軍著述

●明治之細君

洋裝美本石版密書入
定價金八拾錢 郵税金貳拾錢

鐵筆將軍時事に感ずる所あり公務の餘暇得意の鐵筆を揮て著はされたる者乃ち此の小說をなす其文章の艶らかにして意匠の巧みなる特に論ずる迄もなく細君方にして是を讀まば必らずや笑ふ者あらん泣く者あらん喜ぶ者あらん怒る者あらん實に方今拔群の好稗史といふべし請ふ一本を購ふて其の眞味を知られよ

東京本郷元富士町二番地
書肆 盛春堂關田倉吉

日本人 第三號

發兌 每月三日、十八日二回發兌●一冊金六錢五厘●半年分七十錢●一年分一圓廿錢●府外は一冊郵税一錢宛

日本人＝日本前途の國是は「國粹保存旨義」に撰定せざる可からず（志賀重昂）＝日本政治社會の一新現象（國友重章）＝薩長の前途を占ふ（三宅雄次郎）＝日本人の解剖（島地默雷）●雜報＝上海仁川間の航路●魯國巨文島を請求す●本年の氷會の季節●八丈に島廳を設置せんとす●函館港●黒眼以て世上を睥睨す●日本布哇間の航路●陸奥宗光氏の進退●キッチン氏の英國言語の生長●筑波艦の歸朝近きにあり●寄書＝淸國游歷官に望み併して日本國人の注意を促す＝日

本人ヨ望む●雜錄＝波蘭國傾覆記＝美色も亦一種の勢力なり＝杜鵑の歌＝日本之南洋（序）＝安政文久年間の義士＝贈矧川志賀君（散杏大江孝之）＝題馬爾賽曲後

發行所　東京神田小川町廿五番地　政教社

●社會之顯象

壹號既發　一冊十錢郵税二錢一年分前金郵税共七十二錢

目次　何をか社會の顯象といふ、久松義典君●極美小説、坪内雄藏君●繁文省畧、渡邊修二郎君●學校及教員、山形悌三郎君●選擧者被選擧者の關係、西河通徹君●法螺の稽古、末廣重恭君●深坑の比諭、菅了法君●此他論説高橋基一、安岡雄吉、井上勤、瀧本誠一諸君●時事月報

大賣捌　東京神田淡路町一番地　巖々堂

發行所　覆載館

記載するものは詩歌俳諧發句川柳情歌一ト口話小説傳記旅行記文教育衛生經濟農商工の小言等ヨてやはらかくかたく粋も不粋もあまいもからいも御好み次第の七色八色の最と美くしき草花を植付まして御覽に入れ升ものは憚りながら他に類と眞似はありませ舞

○千草叢誌

密書入

第六集本月十五日發兌

一部代價郵税共金五錢○郵券四錢送らハ見本を差上升○會員となるには其旨通知あらば其名を紙上に揭げ升尤入會金ハいらぬ○讀む人ハ三冊代金を前金に送られよ尤も郵便切手なれば一割增しです

毎月投書中各欄毎ふ優等を撰び賞金を進呈すべし

發行所　横濱花咲町三丁目川岸　文友學會

●教育學藝之標準

第三號　一冊八錢（郵税五錢）三ヶ月六部前金四十六錢（郵税無）半年十二部九十錢（郵税八錢）一ヶ年一圓七十錢

目次（論説）學生論（上）青年子弟現在の境遇○心理的より思考時間の長短を論ず●●（評論）加藤弘之氏の貫縮お質す○河田剛氏の自主説○島田三郎氏の開國始末幷歷史論●●（傳記）孔夫子の傳○チルタア、スコット傳●●説苑倶樂部問答（蘇陽居士）○鶯宿梅（南翠外史）○格言數件●●（論叢）日本の女權（寒告世史）○新青年方向チ一轉セヨ（牛山才次郎）●●（學事要報）諸感官の相互影響○水の拒光力○中學生徒の

軋轢○月世界の人類○露國女學生○子守學校の設立○教科書の撿定○日耳曼及び亞米利加ヨ於て婦人の勢力○小兒の喫烟○翺翔鳥○婦人懇親會○人命長短の統計○萬國貿易總覽（二國輸出入表）見本は郵巻九錢

發行所　東京神田區末廣町十二番地　標準社

○博聞雜誌

第十三號　五月五日發兌

毎月二回●一冊八錢●半年分九十錢●一年分一圓七十錢（無郵税）

●目錄●論説○佛法ノ東漸ハ欽明天皇以前ニアリシ説（齋藤美澄）●歷史○德川氏ノ本姓○大鹽平八郎ノ逸事●傳記●津田仙君ノ傳○鶴田皓氏ノ履歷○村田友治ノ譚●天文○太陽ノ熱度○氣候ノ一周期○金星ニモ人類アリ○地球創成ノ年代●地理○對馬島○沖繩諸島○薩海諸島○筑前國城ノ辻山○武藏國穴居ノ遺跡○小金井ノ古塚●人事○米國移住○同移住民ノ數○米國ノ陋風○亞非利加人ノ風習○愛情チ表スル法○洋人日本婦女ノ洋裝チ笑フ○電氣男○電氣娘○二箇ノ胃腑チ有スル人●農事○鐵及ビ電氣ハ植物チ培養ス○魚骨肥料○落葉ヲ以テ肥料ニ製スル法○霜害チ防グ法○蟲害殺生●工業○北亞米利加ヨリ亞細亞チ連接スル大鐵道○朗機山腹開通ノ計畫○無言電話機○自照浮標○玻璃壜製造器械○木綿調革ノ製造○精米機械二種○製茶機械○製鹽機械●商法○物品輸出入價額比較表○金銀輸出入比較表○日清兩國ト加奈陀トノ商業上ノ關係●諸業○印度人ノ幻術○ノアトン氏ノ手術●衛生○日本人ノ食料統計○鹽ノ効用○人乳ト牛乳ノ蛋白質○野菜醫藥的生質○沖繩縣中毒患者○頭髮ニ由テ精神狀態チ判ズ○營養神經ノ存否○醫學上ノ一奇案●教育○小學校教育費ノ自辨法○京都ノ高等女學校○京都ノ盲啞院○私立訓盲學校○高等商業學校ノ隆盛●教法○支那ノ佛法○奇異ノ行者●文箱○日本古代商業史○足利學校古書○菅公自寫ノ法華經○泰西新聞紙ノ紀原●朝鮮ノ新貨幣○古錢チ堀出ス○印刷局ノ製紙○竹紙、藻紙、柳紙、桑紙○竹琴及ビ卅琴○人體化石○人間ノ干物●雜事○ヒヤ〳〵ノ理由○草鮁蟲鮁魚鮁○四不像●廣告

發行所　東京京橋區銀座一丁目六番地　博聞雜誌社

●教學論集

第五拾貳編　四月五日發行　價郵税共九錢

目次●佛教眞理（續）（島地默雷）○明治諸宗綱要（法相宗「續」）（吉谷覺壽）○興産の急務第七（干河岸貫一）●雜錄●「ブッダバーンツ」の趣意書○送某生歸日本兼呈副島種臣先生（菅了法）●詩歌四首○哲言六箇●法律の解釋及其實力●立志須大密●世諺故事●諺問答●「ヒウム」氏の考究漢洋字書文字の數●天爲の靈妙人智の綿題●五拾編發行祝詞（續）●「ミルス」氏の比較心理學其目的及問上九十錢●六冊前金郵税共五拾錢、十二冊同

發行所　東京芝公園廿六號　無外書房

いらつめ第八號第九號第十號目次

八

いらつめ。　婦人と新聞紙。

姫かゝみ。　ふくさづゝみ第五回。まアがれツと第三回。

講義。　美術の話(前號の續)。

文藝美術。　樂典初歩。唱歌(新年の唱歌。花鳥。春の巡山。武藏野の山吹。下總なる藤澤村を過ぎて)。新形の封袋。絵畫。

學藝。　炭薪を倹約する法。

叢話。　鼠たをし。

批評。　交際の栞。女子教育新論。俠美人。

家政要論。　注意の價値。

月報。　數件。

通俗衛生學。　醫學士竹中成憲氏口述。

九

社説。　膝とも談合。

小説。　空行く月第一回。

家政要録。　小供育て方(其二)室内の裝飾。

文藝美術。　樂典初歩。唱歌。遊猟の歌。夜光の珠。下總なる藤澤村を過ぎて。歌(花二十五首。外四首)。新工風裝飾。日本古代男女裝束。

學藝。　蟲の話…蚕。

叢話。　酒井忠直の夫人。爾樂の餘波。現時物語婿引の卷 穂越の品定。

批評。　學海居士里見八犬傳の批評。

講義。　用器畫法稽古の仕方。

餘興。　幽靈をあらはす新法。

月報。　十二件

通俗衛生學。　醫學士竹中成憲氏口述。

附録。　競漕の歌 上眞行氏作

十

社説。　女子教育の方針…婿えらみ。

小説。　空行く月第二回。

家政。　育兒法…なさしい娘…病室の心得…甘い母親。

流行。　新流行の櫛。簪。笄等…流行をべき見込のある蝙蝠傘。

學藝。　蚊の話(蟲話三)…忠義な蚤。

叢話。　桃と櫻の會話。

講義。　用器畫稽古の仕方第二回…茶の間から天井。

雜纂。　日本古代男女裝束第九號のつゞき…足袋の沿革…十二ヶ月和名の解釋。婦人と電話機…人間生死の統計。

批評。　依田氏八犬傳批評の批評第二…みなれさを…捨小舟。

月報。　數件。

通俗衛生學。　醫學士竹中成憲氏口述。

●新日本之建設者●
●新商人之良師友●

通俗商業新報

毎月二回○一部定價三錢○府外毎號郵税一錢を要す

四月十六日第一號發行
五月八日第二號發行

神田錦町二丁目
藤盛堂

いらつめ賣捌所

東京神田區佐柄木町	東海堂
同　同　雉子町	團々社支店
同　同　淡路町壹丁目	巖々堂
同　日本橋區蠣売町壹丁目	信文堂
同　同　新葭町	良明堂
同　本郷區元富士町	盛春堂
同　同　春木町貳丁目	解明堂
大坂心齋橋備後町	岡島支店
堺熊野町	高山慶雲堂
名古屋本町貳丁目	石版舍
信州長野大門町	會眞社
陸中岩手肴町	華文舍

○いらつめ代價　一冊金八錢　六冊(半年分)金四十五錢　十二冊(壹ヶ年分)金八十錢　府外毎號郵税一錢宛申受○毎月第二土曜日發兌

雜誌代ハ前金ニアラザレバ御送附不申候金子御差送ノ手續ハ郵便小爲替ナラバ拂渡郵便局トアル所ニ本郷郵便局ト御記入ノ事幷ニ受取人氏名トアル所ニ本郷湯島天神町壹丁目五十九番地成美社ト御記入ノ事

○廣告料一行(五號文字二十七字詰)金五錢○十一行以上金四錢五厘○二十一行以上金四錢　但シ前金ノ事

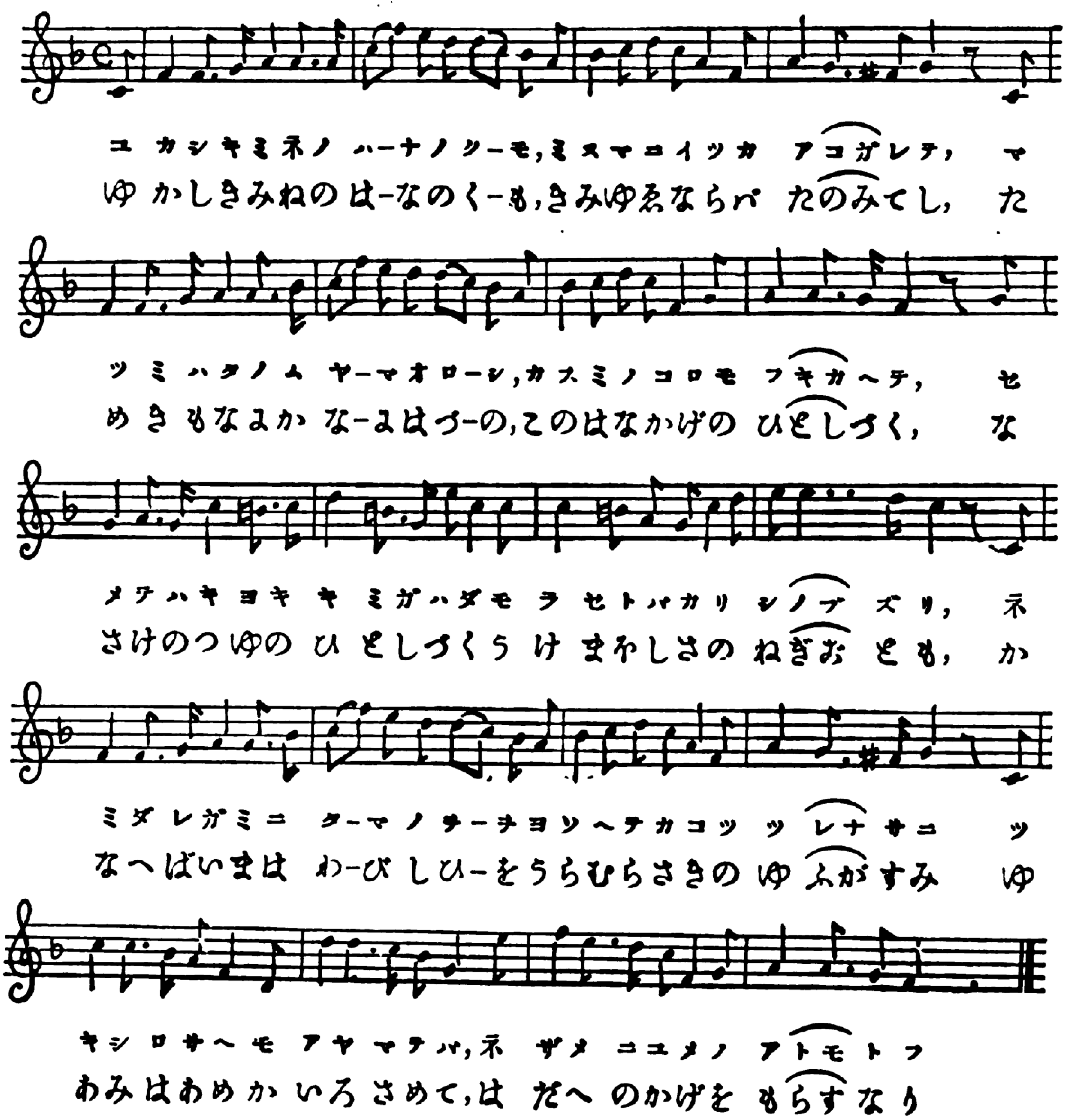
發行人兼印刷人　武田安之助

編輯人　榛葉彦三郎

發行所　東京本郷區湯島天神町壹丁目五拾九番地　成美社

(築地活版製造所印刷部刷行)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY



花の雲　美妙齋

ゆかしき 峯の 花の雲、
見ぬ 間よ いつか あこがれて、
待つ 身は 頼む 山おろし。
霞の ころも ふきかへて
せめては 淸き 君が 肌
もらせ とばかり シノブより。
ねみだれ髮よ 玉の 緒を
よそへて かこつ つれなさよ
月魄さへも あやまてば
寢覺よ 夢の 跡も とふ。

ゆかしき 峯の 花の 雲、
君ゆゑならば たのみてし
ためきも 何か、難波津の
コノハナ蔭の ひとしづく、
なさけの 露の ひとしづく、
うけまほしさの 願事も
叶へば 今は わびし 日を
ウラムらさきの ゆふがすみ、
ゆあみは 雨か、色 さめて
はだへの 影を もらすなり。